ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第53号

信長、秀吉、家康の城と城下町・前編
—歴史地理学と考古学・歴史学— ----------足利　健亮-----1

由良川中・下流域の第Ⅲ様式土器について・後編
—凹線文出現以前の資料を中心に— ----------田代　弘----12

－平成6年度発掘調査略報－----------25

1. 長岡京跡左京第332次　　3. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡

2. 上　津　屋　遺　跡　　4. 梅谷瓦窯跡・中ノ島遺跡

研究ノート　軒瓦からみた恭仁の皇后宮
—恭仁宮北東周辺部の問題— ----------小山　雅人----35

府内遺跡紹介　63. 光明山寺跡----------41

長岡京跡調査だより・50----------44

センターの動向----------47

受贈図書一覧----------49

1994年9月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

信長、秀吉、家康の城と城下町・前編

―歴史地理学と考古学・歴史学―

足利健亮

ご紹介いただきました足利でございます。私の専門は地理学でございまして、先程来のご挨拶にあります調査保存ということには直接見識もなく、その面ではお役にたてませんが、しばらくお付き合い願えるとありがたいと思っております。

タイトルを自分でつけておきながら、かなり大袈裟だと考えていますけれど、いろいろな都市がなぜその場所を選んで立地したのかということに近年非常に関心をもっております。川の渡河点であるとか、水が得やすいところとかいう伝統的な立地論みたいなものがありますが、そういうのとは違って、大大名といいますか、あるいは小大名、天皇政権もそうなんですが、都の場所を選んだり、日本の実質的な首都といってよい大坂城と城下町とか、京都聚楽第あるいは江戸などを営む際、なぜ権力者はそこを選んだのか、そういうことに非常に関心を高めてまいりました。実は、かつて林屋辰三郎先生、藤岡謙二郎先生監修の『宇治市史』の一部を書かせていただくことになって伏見というものを考えた時が、いわば、私の中近世都市への関心のスタートであります。そして、去年ぐらいからは一所懸命、徳川家康がどうして江戸を選んだのかを考えておりまして、まだそれは非常に熟さない考えではありますが、今日はそこまで走ってみたいと思っております。

「城と城下町」というタイトルになっていますが、内容は、織田信長がなぜ安土城を選んだのか、なぜ安土でなければならなかったのか、秀吉が一番最後に京都聚楽第を捨てて伏見へ行ったのはなぜか、なぜ伏見を選んだのか、そして家康は江戸を選んで最後は駿府で死にますが、なぜ最後は駿府に行ったのかという点まで含めて、彼らの心、大大名の心の中を読んでみたい。これは実は、本題の下に副題的に歴史地理学と考古学・歴史学と書きましたが、考古学がご専門の皆様を前にして、あえて考古学とも歴史学とも違う歴史地理学を私はこういうものと考えていますという、一種の挑戦を試みたわけであります。

秀吉がなぜ伏見を選んだかといったようなこと、あるいは信長がなぜ安土でなければならなかったかというようなことは、おそらく歴史学ではとけないだろう。考古学でもとけないであろう、地理学だけがとけるんだと私は学生に言っております。それはなぜかと申しますと、大きな城を選ぶ、城と城下町を造るといったことは、非常に戦略的な意味があ

りますから、決して文献史料には残りません。なぜ、伏見に行くのかということは秀吉は決して公言していない。この考えは彼の心の中にしかなかったわけです。文献史料には残りませんから、これは歴史学の対象にはなりえない。おそらく、発掘調査をしましても、秀吉が伏見へ行った理由は遺物の中には出てこないでしょう。では、なぜ地理学がとけるのかといいますと、地理学の特有の方法・手段が地図と地名であります。彼らが城と城下町を造った事実は地図上に残ります。地図上のいろいろなものの相互関係で問題をとくという手段が我々には残されていて、それがつまり、地理学が他の学問に対してアイデンティティを主張できる唯一の方法ではないかと考えるわけです。

非常に皮相的に見えるかもしれませんが、そういう観点でいろんなことを言ってきているわけで、お口の悪いある考古学者からは、「お前は、あるいは歴史地理学というのは、予想屋か」という具合に言われて笑われたこともあります。そういう方法で、地図の上でかなり大胆なことを今日は申し上げようと考えているわけであります。

前置きを長々とやっておりますと、あっと言う間に時間がなくなりますし、実は、今日取り上げようとしておりますのは安土、そして大坂をちょっとだけ、それから聚楽第、伏見、すこし欲張って江戸の選地理由までと予定しています。細かく話しますと、それぞれに一時間はかかるので、大急ぎで走ってお話ししなければなりません。少々走り話をさせていただきたいと思っております。よろしくお付き合いをお願いいたします。

順番は少し入れ替わったりしますが、一応最初は織田信長からまいりたいと思います。

この話は、すでに発表した内容が多いので、ご覧いただいた方もあるかと思いますが、その点はご容赦いただきたいと思います。

織田信長は岐阜から京都へ出るのではなくて、途中の安土に城を造ったわけで、その位置関係は、人によりましてはこれは途中段階であるといわれております。信長は、京都または大坂に最終的に城を造りたかったという方もいますが、これはなんの根拠もないのではないかと私は思います。おそらく安土が、彼の少なくとも存命中、存命中ということは要するに彼の最後のということですが、最後の目的地であったのではないかと考えます。

これはひょっとすると後に批判を受けるかもしれませんが、批判を覚悟の上で申し上げます。信長は、決して京都には落ち着こうとしなかったのであります。京都へ上がって来るときには、すべてお寺を借用してそこに仮り住まいする。それでは格好が悪いので、部下が二条城を造ったりするんですが、造るのを黙って見ていてできあがったら天皇に寄付したり、あるいは足利将軍に寄付したりしましたから、自分は最後に本能寺でドジを踏んでしまいますが、京都には絶対定着しようとしなかった。彼は、安土に定着しようとしたわけですが、それはいったいなぜかということを考えて見たいと思います。

安土は、岐阜と京都の間、あるいは岐阜と大坂の間の非常に戦略的な場所で、そういう位置を選んでいます。ここで、いきなり織田信長はなぜ安土を選んだのかというテーマに入りますけれども、結論はきわめて簡単で、地図の上でものを考えるというのは、あまり理屈がありません。ほとんど直感的な話なのであります。それは安土と坂本です。それからもう一つは安土と長浜です。この距離がひょっとしたら等距離に近いのではないかと、ふと考えつきまして地図の上で測ってみたわけです。そうすると予想通りといいますか、たいへん愉快であったのですが、片一方は26km、片一方は27kmであることがわかりました。1kmの差があるじゃないかという理屈は成り立つのですが、この1kmは3％以内、消費税の枠内であると考えますと、これは誤差の範囲であるという、自分を納得させる屁理屈ですが、誤差の範囲といえます。つまり同じ距離であるとみて大過ない。これが実は信長が安土に城を選んだ理由であろうという具合に私はみているわけです。

なぜかと申しますと、つまり最初、信長軍団といいますか、その軍団は坂本に城を造って、明智光秀をここに据えます。なぜそうするかと申しますと、その直前に比叡山の焼き打ちをやります。このことで信長は非常に評判を落とし、今年まで比叡山は怒り続けてきました。たしか今年になって比叡山はようやく怒りをといたということがありますが、比叡山を焼き打ちします。それは、比叡山が浅井・朝倉、特に朝倉軍に与したからであります。元亀元年のことですが、信長は朝倉方を攻めに行きます。いよいよ木の芽峠を越えて、越前の本拠に入ろうとした時に浅井が寝返って、信長は前後から挟み撃ちに合いそうになり、大慌てで琵琶湖の西を通って京都へ帰ります。このとき、しんがりを務めた秀吉は非常に高い評価を得ますが、京都に帰ってきて、それから琵琶湖の東を回って、いわゆる千草越え、八日市からずっと東の方へ行く山越えで岐阜へ逃げ帰ります。その途中で杉谷善住坊という者に狙撃されて弾丸が身をかすめるというピンチがあった。そういう敗戦の経緯があって、朝倉の怖さを痛感しています。こうして逃げ帰った後も彼はずいぶん忙しく、大坂の一向一揆を攻めに行っているうちに、朝倉軍が3万ぐらい湖西を南下してきます。それで、信長は急いで帰り、京都を経由して朝倉軍と対峙しますが、朝倉軍を受け入れたのが比叡山で、そこで3か月ほど向かい合い、膠着状態が続いたことがあったりしましたから、朝倉に与した比叡山に対する憎しみが非常にあって、その結果、朝倉軍と適当に和睦し、朝倉軍が本拠に帰った後で比叡山を焼き打ちすることになるわけです。

それで、坂本に城を造るというのが行われます。それが元亀2(1571)年のことであります。それから、今度はいよいよ朝倉・浅井を攻めることになりますが、その時の「方面軍司令官」というような呼びかたを、堺屋太一さんがしておりますけれども、方面軍司令官が秀吉でして、これはたいへん活躍をしました。結局、元亀4年にようやく朝倉・浅井連

合軍を倒すことに成功して、その後、秀吉は小谷城を貰うわけですけれども、どういうわけか、小谷ではなくて、最終的には今浜という町、琵琶湖に臨んでいる今浜という町を城下町にして、長浜と名を変えました。多分、信長の長を一字貰ったのでしょう。このあたりが秀吉の大変巧妙なやり口でありますが、長浜に改名してここに城を構えます。

このように、まず坂本を造り、次に長浜を造る。坂本は比叡山と京都を押さえる場所ですし、長浜は北陸を睨む場所であります。このように前衛と後衛を造っておいて、ちょうどその真ん中に、それから２・３年後に「天正四年安土山ご普請」が出てくるわけです。ですから、ちょうど、囲碁でいえば、三連星という布石の打ち方がありますが、あれと同じように、点を二つ打っておいてその真ん中に一個打つ。そうすると非常に安全ではないかという、その方法で安土は選ばれたのではないか。答えはそれだけなんです。極めて単純といえば単純で、しかしこれはおそらく言った方が勝ちであります。そうではなかったということは言えないと思いますし、そうであるという主張の方が少なくとも証拠がある。「地図上」の証拠があるわけで、強いのではないかと思っているわけです。

しかも、実は、安土城から長浜城が見えます。これは肉眼でも見えます。27kmありますが、特に西陽がさしているときが一番見やすいのであります。私は現実に安土の天守台から、長浜の町のビルが西陽に映えているのを見ました。途中に荒神山がありますので、これで見えなくなるかなと恐れて安土の天守台へ上がったんですが、荒神山の西の麓をかすめてちゃんと見えますね、相互に。ですから遠眼鏡を使えるでしょうし、烽火を使えて、連絡が可能であった。同じように安土から坂本が見えます。ただ、今は見えません。安土天守台の西側に木が生えていまして見えませんけれども、それがなくて天守閣があってそこに上がれば確実に見える。そのことは、逆に坂本から安土山が見えますので証明できます。そういう位置関係でもってここに城を選んだわけです。

ところで、安土山のすぐ横に観音寺山という大変雄大な山があります。安土山は、たしか標高が200mだったと思いますが、これは琵琶湖の湖面が85mほどですから、100m余りの高さの山ということになります。そのすぐ東南に観音寺山が続きます。観音寺山の標高が400mほどであったと思います。したがって、琵琶湖の湖面から300m余りです。安土山は、琵琶湖の湖面から100m余りです。すると、実質、観音寺山は安土山の三倍はあります。観音寺山の方がはるかに要害堅固に見える。観音寺山に登ると、そのすぐ下に安土山が見える。そんな、上からのぞき込まれるような山が横にあるにもかかわらず、安土山をあえて彼が選んだのはなぜかと考えてみますと、実は観音寺山というのは危ないのです。周囲から火をつけられると、火の山になる可能性がある。現に、佐々木承禎がここにいましたときに、信長が攻めて来たというだけで彼は逃げ出すわけで、火をつけられたら危ないこ

とをよく知っていたのではないかと思います。信長は火つけの名人で、ほとんど火の神さまになってもいいと思われるくらいの人です。どこか攻めるときは、必ず火をつけて周りを焼いた。比叡山の焼き打ちも同じようなものです。火つけの名人は、火をつけられることの恐ろしさをよく知っていたのではないか。その点から言うと、安土は周りの半分以上が水面ですから、そっちへ逃げることも可能ですし、山が低いのですぐ降りて逃げられることもありますから、おそらく問題なくこれは安土の方が有利であったと考えるわけです。

いずれにせよ、そのようにして、三つの城がともに琵琶湖の湖面に臨んでおりまして、琵琶湖の湖水が彼の経略の進展にともなってほとんど内廊下のような形になってきます。安土を営むまでは、大きな船を造って軍船にして琵琶湖上の軍隊の移動に使っていたのですが、安土を造り始めると同時にその船を壊して十隻かの小さい早船に造り替えておりまして、もうほとんど廊下を走り回るような感じで琵琶湖を使っていた。かつ、それから2年ほどして、大溝城に甥の信澄を据え完全に琵琶湖を掌握するわけです。それが、彼の経略であり、しかもこの琵琶湖湖岸一帯というのは北へ行けば若狭湾、南東の方へ行きますと伊勢湾、そして、南西の方へ行きますと巨椋池を通じて大阪湾という大変いい場所ですから、安土は彼の最終目的地であったとみてまず間違いないだろうというわけです。

次に、安土という地名ですけれども、安土山は、最初からその名前であったとみる説もありますが、そうではなかったとする説もあります。私は、安土山の名前はもとからあったのではないという説に加担いたします。それは、『細川家記』に、「天正四年丙子正月、信長江州目賀田山を安土と改む」とあり、つまり同時代史料にありますから、これが正しいと考えております。では、なぜこの山を安土という名前に改めたのか、安土という名前はどこからとってきたのか、ということが問題になるわけであります。

安土という地名については、現在の能登川町との境に天主跡、これが現在の安土城跡ですが、それから東南へ直線距離で約2㎞のところに「安土」という地名があります。これが今、浄厳院というお寺のあるところで、安土宗論が行われたことで大変有名なお寺ですが、ここに安土という小字地名がある。これが安土地名の原点ではあるまいかと思っております。こういう地名を我々は使うわけですが、この地名がいつできたのかわからないではないかという議論が当然あります。ありますが、実はこの地名の右側に加賀という小字が見えることを含めて考えると、安土という小字の古さが推測できるのです。

このことは、「大和豊浦荘検注目録」からもわかります。これは、正和2(1313)年の史料で、『鎌倉遺文』に収められていますが、タイトルに示された「大和」は『鎌倉遺文』編さん者の誤りで「近江」でなければなりません。なぜかと言いますと、この文書に記された「八幡」「新宮」「若宮」「桑実鎮守」「観音寺」は、すべて安土と周辺に現存している

からです。つまり、上記文書は、安土の「上豊浦」「下豊浦」一帯にあった「近江豊浦荘」のことを記した文書であります。この中に安土寺という寺があり、同時に加賀寺という寺があります。1313年にあったそれら加賀寺・安土寺が、安土とか加賀という地名を生むもとになったと考えるのが最も理にかなった解釈です。その他、字東辻子、西辻子と書いた地名があります。これは、「づし」とよみます。これも文書の中の図師(ずし)に与えられた田地などの記載と対応し、その結果そういう地名が残ったとみられます。つまり、安土の小字は、遅くとも1313年以来の地名と考えることが可能です。

「安土」の小字名は古いのです。そして、この安土という地名に信長は注目して、目賀田山へ引っ張っていった。「土を安んずる」、国土を安定したというように読みますと、信長の事業を象徴する非常によい地名であります。近くに豊浦、豊かな海岸という意味の地名もあり、常楽寺という常に楽しむ寺という地名があり、安土という地名が重なったら、これはもうめでたいことこの上もない。大名というのは大変地名にこだわる種類の人間であるということを今日は一つ強調したいのです。

福井県の方がおられましたら、ご存知ですが、柴田勝家が北ノ庄という地名が気にくわんと言って、福井に名を改めさせた。北ノ庄の北というのは敗北につながる、嫌だというのです。信長は、井ノ口と言っていた町を岐阜に改めた。また、今浜を長浜に改めることを認めています。大変地名にこだわった人間であります。その前提に立つと、信長は安土、「土を安んずる」、我は大業を成せりということで、この地名を選んだと考えられます。安土は、彼の最終経営の土地で、ここで天下を掌握した。この時、すなわち天正４年に安土を造り始め、同時に形の上でしょうが、引退して息子の秋田城介に家督を譲っています。以上アウトラインだけですが、地図的な位置関係と地名のよさということから、安土を選定したとは読めないか。これが本日最初の話題です。時間の関係で先を急ぎます。

次に、秀吉であります。天正10年にご承知のように信長は本能寺で死んでしまいます。中国路から大急ぎで帰って来て天下を取った秀吉は、どのような都市造り、あるいは都市の選地を行うことになるのでしょうか。大坂が、まず一番先にクローズアップされてまいります。秀吉は、天正11年に、大坂の築城を開始します。それ以後、ずっと大坂を維持し続けて、大坂には巨大な城と城下町を造るわけであります。

大坂の城と城下町はまぎれもなくずいぶん大きい。今残っている大阪城は、たいへんこじんまりとさせられてしまった後の大阪城跡であります。秀吉時代の大坂城は、西は、東横堀という堀まで達します。もちろん、天守・二の丸・三の丸だけではなくて大大名の屋敷を含んだ城郭でございます。そして、その大きさと伏見城と較べますと、大坂城と伏見城は規模においてどちらが上ということはない。両者はほぼ同じくらいの規模の城郭であ

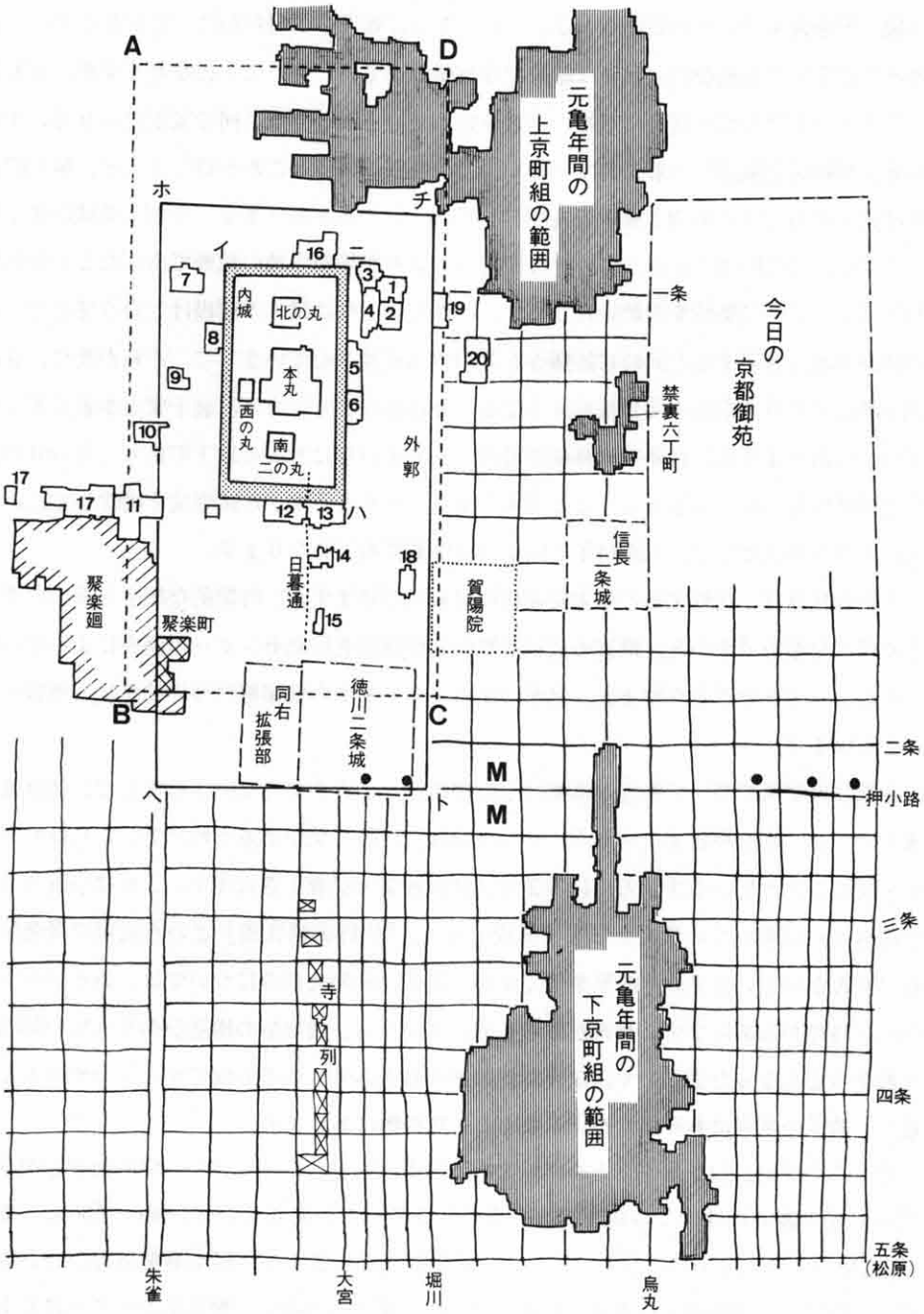
ったわけで、したがって大坂が秀吉の最大の城ではなかった。大坂城が一番大きかったというわけではないとことを覚えておいていただきたいと思うのです。

さて、天正11年に大坂城の築城が開始されます。この築城経過、そしてそれがどのくらい城下町を含んでいたかというのは、これはまさに考古学が明らかにして下さるテーマで、我々には手も足も出ない。我々は結果だけを使わせていただくことになりますが、ともあれ注目すべきは大坂と同時に京都の経営を始めていることです。同じ天正11年9月にすでに秀吉が妙顕寺城造りに着工しています。この妙顕寺城はどこかと申しますと、第1図のほぼ真ん中あたりにM・Mと書いて丸印をしてあるところがあります。今の二条城のすぐ東南ですが、このM・Mという二つの一町四方のところが妙顕寺城の城地であったと言われております。そこに築城を開始いたします。しかし、これはほんの腰掛けという感じで、この妙顕寺城に着工すると同時に妙顕寺を北の方へ移動させていまして、それが後に、寺の内と呼ばれる日蓮宗の寺院集積地区を造ることになります。今日、裏千家とか表千家とかが近くにありますが、日蓮宗の移転の最初は、天正11年に大坂の城下町造り、城造りの開始と同時に行われているということであります。とりあえず、妙顕寺城を経営しておいて、それから3年ほどして、天正14年にいよいよ聚楽第着工になります。

大坂と伏見は、比較するのに大変面白い対象になりますが、時間的な順序からいいますとやはり聚楽第ですから、最近の京都府埋蔵文化財調査研究センターの調査によっていろいろわかってきたことを踏まえ、私がいま考えております聚楽第について先にご報告したいと思います。

京都に聚楽第を築いて秀吉が本拠にした理由は、いうまでもないことでして、彼は都に来たかった、都を押さえたかった。そのへんは、信長と発想が違うわけで、これはもう説明を要しないと思います。天正14年2月21日に聚楽第が着工されます。これは当時の『多聞院日記』に載っていますからまず間違いなく、「内野御構普請」という表現で聚楽第の着工が書かれています。その聚楽第ですが、従来、その大きさについては、いろいろな説が江戸時代からあります。秀吉が破壊していますから、聚楽第の構造がかなり早い時期からわからなくなったようです。江戸時代の地理書をみても千差万別です。一つずつみんな違う。若干の系列はありますが、少なくとも数種類はあります。

そのなかで定説的な地位を占めていたのは第1図に示した、イロハニ位の大きさの少し黒い太線で書いたほぼこの範囲であります。この形だと南北せいぜい500～600m、東西300m足らずの大変小さいものです。この説の通りとしますと、聚楽第を造るのに大坂城造りに負けない労働力・仕事量がかかったという話と合わない。聚楽第があまりにも小さいのです。ですから、もうちょっと違う考え方があるのではないかというのが私のベース



第１図　聚楽第推定位置図

にある考え方でございます。その考え方と漢字に対する私の理解度の成長とともに自分の考え方がまとまってまいりました。漢字の理解度とは何かと言いますと、城郭ということばでございます。私は、城郭ということばの意味を正しく知ったときに、ちょっと大袈裟ですが、漢字に本当に目覚めたと言えるように思います。小学校に入る前に漢字を覚え始めたのが最初の目覚めとすれば、城郭という語の意味を知ったときが漢字に対する二度目の目覚めであります。これが本当の目覚めだと自分では思っていまして、城郭ということばには大変思い入れが深いのです。城郭ということばを聞きますと、何となく大坂城の石垣を思いだしますが、そうではないことを中国学の同級生から教えてもらいました。「城郭は、内城、外郭ということばの略なんだ」、「城郭ということばにすでに城の二重構造が隠されているのだ」ということであります。時刻ということばには、時と刻という全然違う単位が組みあわさっています。30分おきと2時間おきの単位が組み合わさっている。なるほど、漢字の用語は、単に二つ文字を並べるだけではなくて、一つずつ全部意味があるということを知ったのです。これはたいへん大きい影響を私にもたらしました。要するに、聚楽第も二重構造であったに違いないと考えるようになったのです。

付表1　町名からの武将屋敷推定表

番号	町名	武将名
1	如水町	黒田(小寺)如水
2	小寺町	黒田(小寺)如水
3	弾正町	上杉弾正大弼景勝
4	飛騨殿町	蒲生飛騨守氏郷
5	常陸町	木村常陸介重滋
6	藤五郎町	長谷川藤五郎則秀
7	伊勢殿構町	伊勢兵部少輔
8	加賀屋町	前田加賀守直茂
9	信濃町	鍋島信濃守勝茂
10	福島町	福島左衛門大夫正則
11	稲葉町	稲葉入道一徹
12	中村町	中村式部少輔
13	浮田町	宇喜田中納言秀家
14	中書町	脇坂中務大輔(中書)安治
15	左馬松町	加藤左馬助嘉明
16	栄町(阿波殿町)	阿波杢之助
17	長門町	木村長門守重高
18	直家町	中納言宇喜田直家
19	主計町	加藤主計頭清正
20	甲斐守町	黒田甲斐守長政

その二重の構造を示す史料が、二つあります。その一つが『聚楽行幸記』で、これは同時代史料ですから、記載内容は確かなものであるという前提に立ってものを申します。それによりますと、「四方三千歩の石のついがき山のごとし。楼門のかためは、鐵の柱、鐵の扉、瑶閣星を摘んでたかく、瓊殿天に連なりてそびえたり。甍のかざり、瓦の縫めには、玉虎風にうそぶき、金龍雲に吟ず」。ちょっと大時代な表現ですが、おそらく相当きらびやかなものであったと思われます。そういう門を持った四方三千歩の石の築垣があった。その表現は、『太閤記』にも受け継がれております。要するに周囲3,000歩あるわけです。すなわち、周囲5,400mあるわけです。

それに対し、『兼見卿記』ですが、これには「中四方千間」と記しています。ていねいに「中」という字まで入っていまして、四方千間であります。四方千間と四方三千間、つ

まり１対３、三倍の長さの外郭があったという解釈が生まれ得る、ということであります。

その次に、『駒井日記』で、「聚楽柵木通間数」が示されています。これは聚楽第内城の大きさを非常に明確に語ってくれているのであります。つまり、内城に門が三つあって全部で約千間の周囲になりますけれども、南二の丸門から北の門まで四百五十間、北の門から西の門まで三百五十五間、西の門から南の門まで二百二十二間、すなわち、南と北と西に門があった。それが聚楽第の内城であったことを示しております。

続いて、この内城をとりまく、外郭の話をさせていただきますが、第１図をご覧下さい。先ほどの通説の聚楽第とは若干違います。というのは、京都府埋蔵文化財調査研究センターの調査に基づいて、もう少し正確な復原案を私は考えていますが、だいたいはイロハニの大きさが内城で、これが千間です。1,800m前後あります。そうしますと、外郭は四方三千歩ですから、これの三倍でなくてはならない。三倍の長さということは、イロを南北に三倍し、イニの線を東西に三倍にすれば得られるわけで、そういう具合にして機械的に三倍の外郭線を求めたのがアルファベットのABCDを繋ぐ点線であります。これは作業仮設というべきもので、ABCDの四点を結びましたが、そうすると、いろいろな問題が出てまいりました。

そういう形でそこに外郭ラインがあったと考えるには無理が余りにも多すぎます。その一つは、堀川を越えて東の方へ広がることです。堀川は平安京以来の大きい川で、立派に堀になりますから、堀川を東に越えてしまう外郭線を想定するのは、少し問題があります。堀川の東べりのところに、平安京時代の屋敷である賀陽院があって、発掘調査されたときに、私はひょっとすると聚楽第の外郭の土塁が出てくるのではないかという期待をもって現地を見に行きましたが、何もなく、いきなり平安時代の遺構に行きついてしまい、ここに聚楽第の外郭はなかったことがみごとに確認されてしまいましたから、CDのラインは全くだめなのであります。それで、堀川の西までこれを後退させました。

それから、AB線は、今度は千本通を西に越えてしまいます。これも問題があります。なぜかと申しますと、千本通をずっと北へ行きますと、丹波へ向かう長坂口、つまり京都の御土居の七口の一つになります。南の方へ行きますと丹波口という、山陰道の出入口になります。それらの口を南北に繋ぐ道路が千本通ですから、これも外郭がその西に越えてしまうと具合が悪い。そこで、外郭をこれの東側まで後退させますと、ほぼ堀川の線と対称的になりますので、とにかくABCDのラインをAB線は東へ、CD線は西へ移しました。

北はどうしたかと申しますと、北の方に薄黒く塗ってありますところが、元亀年間に存在した町の名前が現在の町の名前に残っている範囲を示したものです。ということは、そこが秀吉によって壊されなかった部分であると一応理解できますから、その町を避けると

ころまで外郭を南へ下げますと、片仮名のホチ間のラインになります。そういう具合に三方を縮めてまいりまして、その後に全体で三千間になるようにすると、ずっと南の方へのびて行ってしまいます。そのようにして求められた南辺がヘトを結ぶ線でありまして、これで全長三千間という形で外郭線を推定したのであります。

この推定はいろいろな面で合理的で、秀吉が京都の町の正方形の地割りの中に南北方向の半町ごとの道路を造ったということ、有名な話としてありますが、それが実は押小路より南という記録があります。この推定外郭南辺のヘト線はまさにその押小路通のラインに位置するわけで、これから南に、黒い点を上端に付けた道路ですが、これを秀吉が開通したこととつじつまが合うわけですね。さらにあえていえば、現在の二条城、徳川二条城ですが、徳川二条城が一体なぜあの場所にあるのかという問題にも関わる可能性がある。ひょっとすると、この想定外郭の一番東南の隅が秀吉時代の徳川の屋敷であったのではないか。これはものすごく大胆な話であって、ほかには何の証拠もないのですが、二条城の下を掘る機会があったらそのへんのところが何とかならないかという、予想屋としての期待を持つわけであります。秀吉時代の家康屋敷はわかりません。いろいろな推定はありますが、ぜんぜん兆候はありません。ともあれ、こうやって外郭を想定いたします。

外郭を想定しますと左下、ホヘ線の左側であります。Bの上に斜線を施した部分があります。斜線を施したこの部分が実は「聚楽廻」という、現在そういう地名であります。ですから、聚楽第の外郭の外回りとたいへんうまく一致してきます。というように、聚楽第外郭を考えることができるのではないか。この中は、もちろん大大名の屋敷地区でありまして、それらを囲んだ郭がつまり内城に対する外郭ということでしょう。

もちろん、外郭のさらに外から大名屋敷の瓦などが出ておりまして、もっと外にもいろいろな大名屋敷があったようですが、これは伏見でもそうらしいのです。そういうことはありうるでしょう。これは史料としては同時代のものでありませんが、『京町鑑』という、京都の町のことを説明した江戸時代末期の文献がございます。それを見ておりましたら「聚楽の濫觴」という記事がありまして、その中に、「城外の諸方に諸候の屋敷を構えて」というのがありました。この城外が内城の外なのか外郭の外なのか問題ですけれども、城外にもいろいろな大名屋敷があったことが書かれております。そういうことが考古学的にも、どんどん明らかになりつつあるのが、京都の状態であることを申し上げたいわけであります。それに伴って京都全体がどういうプランになるかということに関しても、あまり詳しく触れる時間はありませんが、ちょっとだけみておきたいと思います。

（以下、次号）

（あしかが・けんりょう＝京都大学）

由良川中・下流域の第Ⅲ様式土器について・後編

—凹線文出現以前の資料を中心に—

田　代　　弘

⑤宮遺跡Ｄ地区ＳＤ19出土資料(第８図～第10図)

ＳＤ19は、丘陵の等高線に直交して掘削された幅約2.2m、深さ約1.3mの溝であり、50mにわたって断続的に検出されている。断面形は逆台形である。埋土の状況は「厚さ10～20mを測る縞状の堆積土」がみられ、溝の埋没後に溝出土遺物とほぼ同時期の弥生時代中期の竪穴住居が重複して作られていることから、「比較的短期間で埋没した」と考えられている。(注10) 溝の中～下層から土器・石器類が一括出土している。この溝から出土した土器には、広口壺・細頸壺・短頸壺・甕・高杯・鉢などの器種がある。

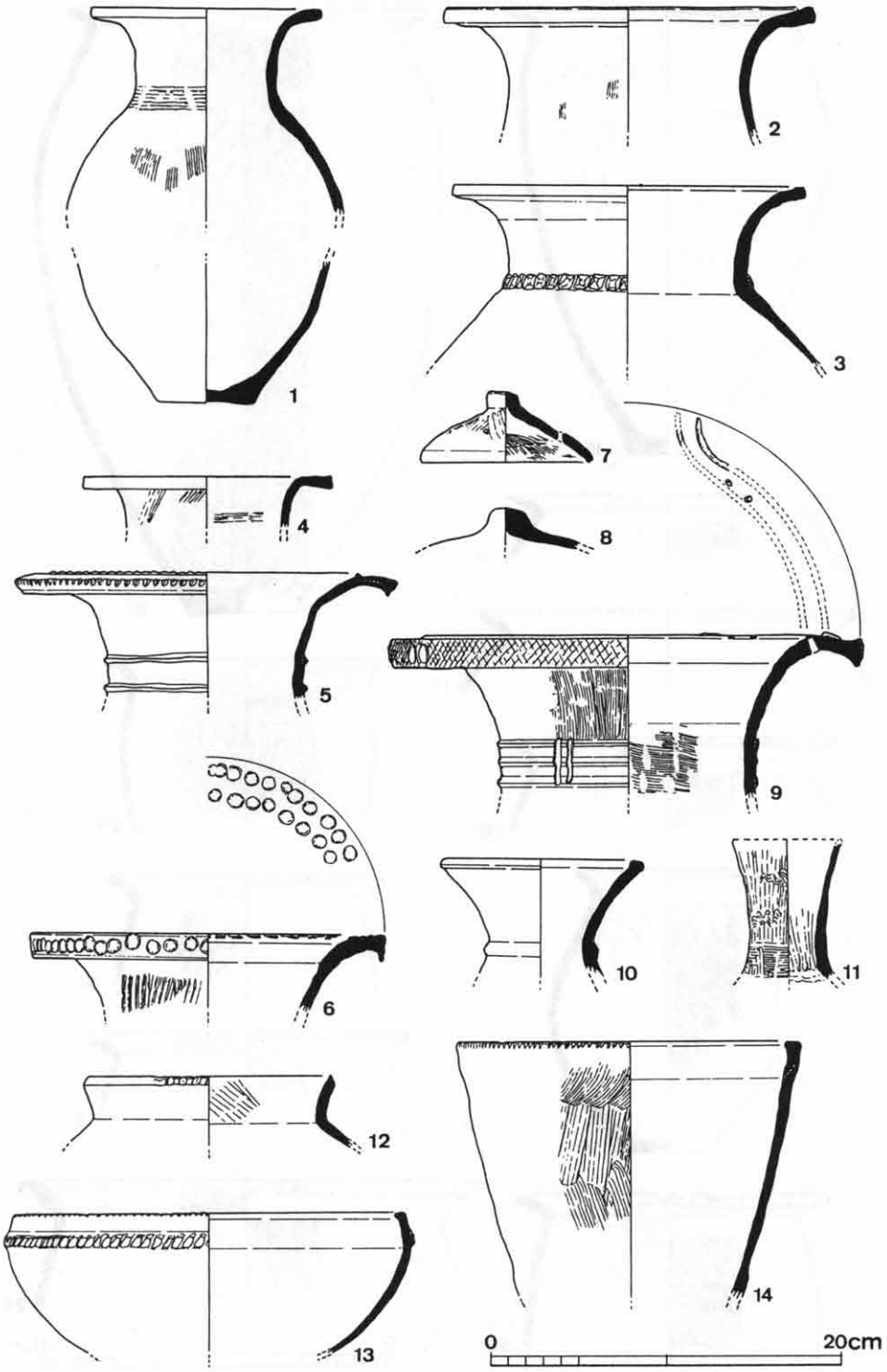
広口壺(１～６・９～10)　円筒状の頸部から水平あるいは外反して開く口縁部をもつもの(１～６・９)と直線的に広がるもの(10)とがある。

１は、体部中央が欠損しているが、ほぼ全形を知ることのできる個体である。撫で肩の小形壺である。文様は頸部に櫛描直線文を一帯巡らすのみである。体部外面に刷毛目がみられるが、内外面とも主にナデ調整で仕上げる。口径約13.1cm、器高約21.2cmを測る。３は頸部に指頭圧痕文凸帯。５は口唇部に刻み目文、口縁内面に刻み目凸帯文を一条付加する。頸部に断面三角形の貼付凸帯を二条巡らす。９は、端面を拡張し斜格子文を施文した後、２個一対の円形浮文を付加する。口縁内面には二条の貼付凸帯を付加して注水部を作る。凸帯間には２個一対の紐穴がある。頸部には貼付凸帯を三条巡らし、後に２個一対の棒状浮文を付加している。調整は、刷毛およびナデである。口径約27cmを測る。６は口縁部端面と内面に円形浮文を密に施す。10は小形の壺で、頸部に貼付凸帯が一条巡る。

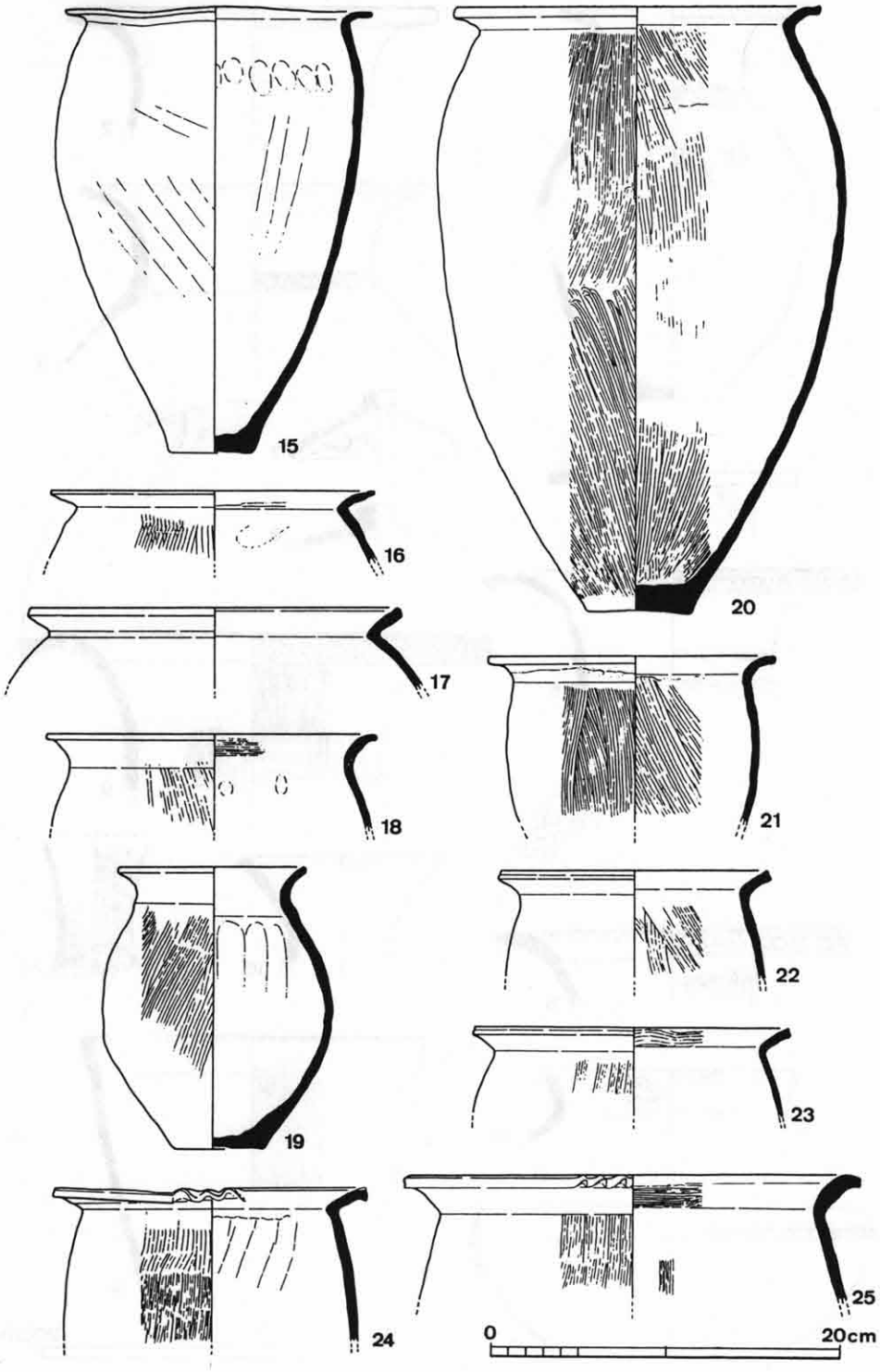
細頸壺(11)　直線的に立ち上がる頸部から口縁がゆるやかに開く。頸部に２帯の櫛描波状文、頸部と体部境界に櫛描直線文を施す。口径約6.2cmを測る。

直口壺(12)　短く直立する口縁をもつ。口縁端部に数個一単位の刻み目文がある。胎土・焼成は甕に近い。

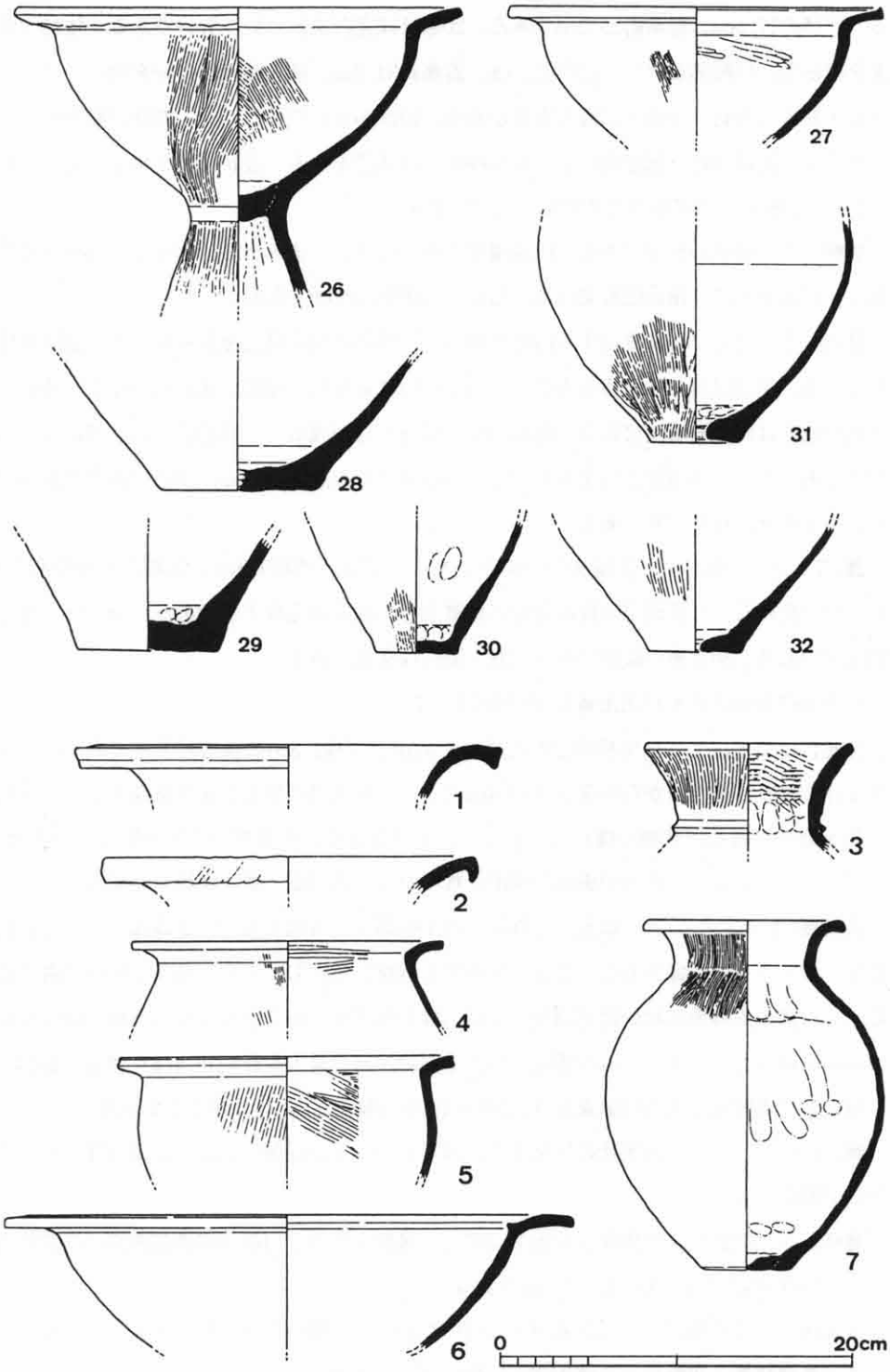
甕(15～25)　「く」の字状に外反する口縁をもち最大腹径が上位にある長胴のもの(15・17・20)と口縁がゆるやかに外反するもの(18・19・21)、「く」の字状に外反し端部に面を持つもの(22～25)とがある。15はほぼ完形である。器体は板ナデ状の調整で仕上げ



第８図　宮遺跡ＳＤ19出土遺物(1)



第９図　宮遺跡ＳＤ19出土遺物(2)



第10図　宮遺跡ＳＤ19(3)・ＳＫ17出土遺物
ＳＤ19.26～32　　ＳＫ17.1～7

る。口径約17.6cm、器高約25.2cmである。20もほぼ完存する良好な資料である。体部内外面を縦刷毛、口縁部をナデ。口径約21cm、器高約34.3cm、最大腹径23.1cmを測る。15・20とも体部の上方約三分の一に最大腹径がある。19は小形品である。23・25は口縁内面に横ハケ、24・25は口縁を部分的に上下から押圧し波状部を作る。波状部は３個で一対をなしており、口縁部に等間配置されていたと思われる。

高杯(13)　鉢状の杯部である。口縁端部をやや内側につまみ出し、口唇部に刻み目文を施す。口縁外面には指頭圧痕文凸帯が巡る。口径約22.1cmである。

鉢(14・26～27)　14は直口する口縁をもち、口唇部に刻み目文を巡らす。26～27は台付鉢である。26は屈曲して斜め上方にのびる短い口縁をもち、端部に狭い面を作る。杯部内底面の成形は円盤充塡法による。脚部内面には絞り目が残る。口径約25.3cm。27は26と同形態であるが、口縁端部をつまみ上げてしっかりとした端面を作る。内面に篦磨きが施され、胎土も26に比べて密である。

蓋(７・８)　小形で、乳頭状のつまみがある。７は口径約9.8cm、器高約４cmである。紐穴が一孔残る。外面刷毛の後部分的に篦磨き、内面は刷毛後ナデである。28・29・31・32は壺の底部、30は甕の底部である。31・32には穿孔がある。

⑥宮遺跡Ｄ地区ＳＫ17出土資料(第10図１～７)

ＳＫ17はＤ地区Ｌ８区で検出された長軸2.05m、短軸1.8mの長方形土坑である。削平を受けており、検出面からの深さは約24cmである。埋土は暗褐色を示す粘質土であり「長径20cm前後を測る10数個の礫石とともに、大型の破片を含む多数の弥生土器破片が出土」(注11)している。土器は、土坑の中央部で検出されている。広口壺・甕・高杯などがある。

広口壺(１～３・７)　１は大きく外反し水平に開く口縁部をもつ。２は端部を下方に拡張して垂下ぎみの口縁をもつ。３は口縁が短く外反して立ち上がり、頸部に貼付凸帯を巡らす。口縁の内外面に粗い刷毛調整。７は口縁が体部から短く立ち上がった後に強く外反する無文の小形壺である。口径約11.8cm、器高約20cm、最大腹径約15.4cmを測る。器形・法量ともに青野遺跡第12次調査ＳＤ202出土資料(前編第２図７)に類似している。

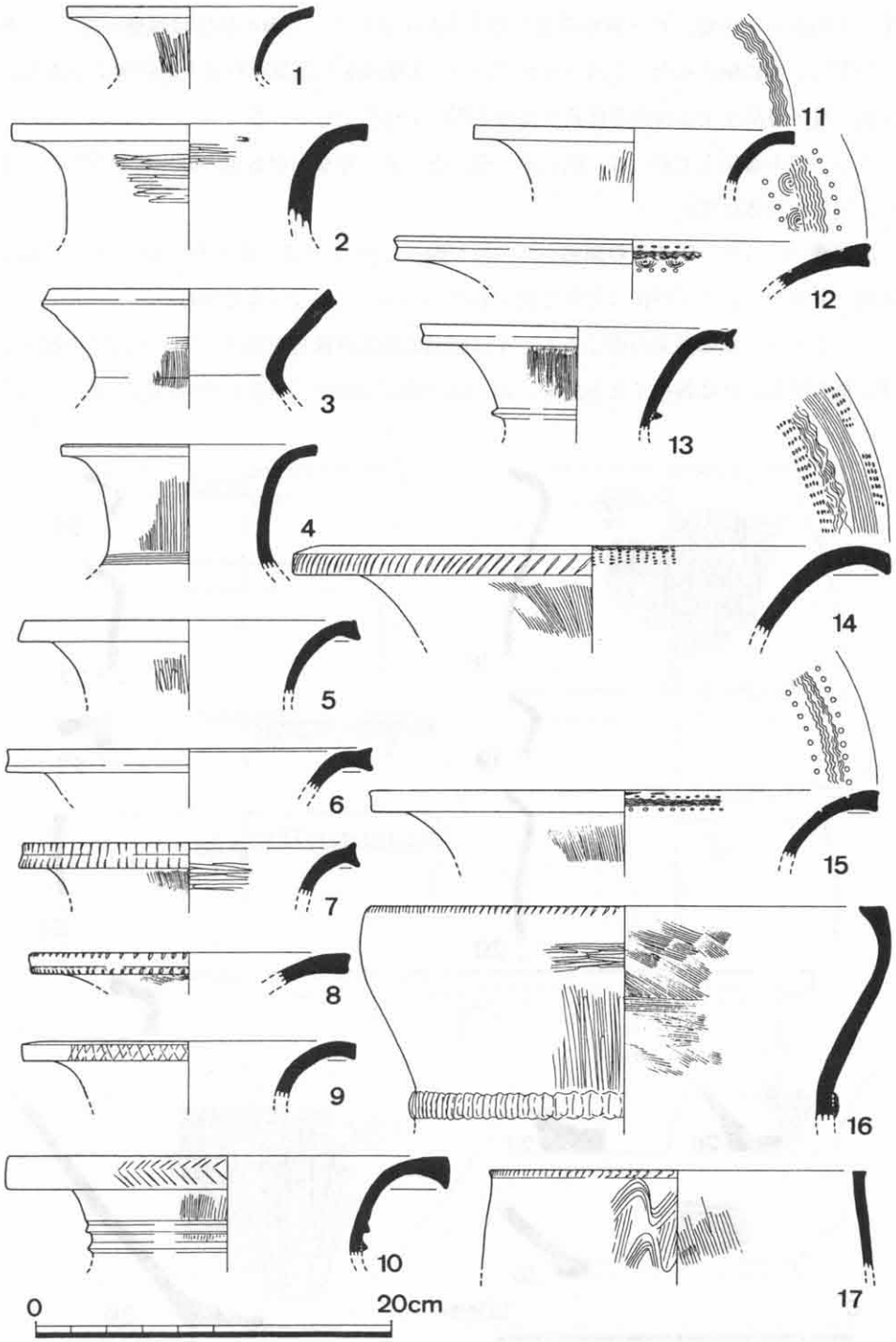
甕(４・５)　「く」の字状に外反する口縁をもつ。４は長胴である。５は口径に対して器高が低い。

高杯(６)　内湾気味の体部から水平に開く口縁部をもつ。口縁の屈曲部内面に凸帯を巡らす。口径約32.2cm、残存高約7.8cmを測る。

宮遺跡ではこの他に方形周溝墓周溝(ＳＤ02)からも同期の土器が若干出土している。

⑦志高遺跡第７次調査ＳＤ86240出土資料(第11・12図)

ＳＤ86240は、幅５m、深さ1.5mを測り、約８m分検出されている。溝の北西端はＳＸ



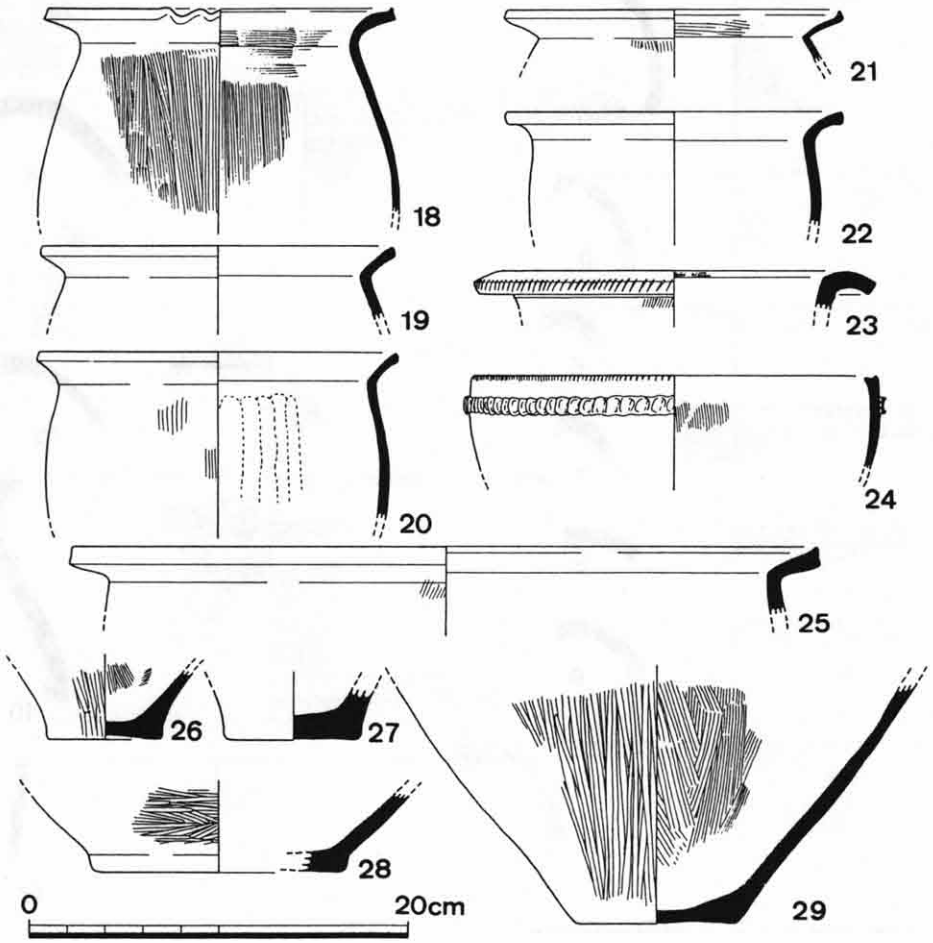
第11図　志高遺跡第７次調査ＳＤ86240出土遺物(1)

86231(集石遺構)と2号墓(貼り石方形周溝墓・第Ⅳ様式)により破壊されている。溝の埋土は4層あり、下層、最下層から多くの土器が出土した。上層の砂層は堆積が厚く、「ある時期に一度に埋まった」と考えられている。上層砂層には第Ⅳ様式土器の混入があるが、下層～最下層出土土器は第Ⅲ様式以前の土器が主体をなしている。(注12)

下層～最下層出土土器には、広口壺・受口壺・甕・鉢などがある。細片化したものが多く、完形の個体は無い。

広口壺(1～15)　円筒状の頸部から口縁が開くもの(2・4～6・9～10)、短く直線的に開くもの(3)、ラッパ状に大きく開くもの(1・8・11～15)などがある。

1・3・5～6は無文の壺である。4は頸部に櫛描直線文を施す。7・8は口縁部上下端に刻み目文、9は斜格子文を施す。10・13は頸部に断面三角形の貼付凸帯が巡り、10の



第12図　志高遺跡第7次調査ＳＤ86240出土遺物(2)

口縁部には羽状文を施している。10の凸帯間は強いナデがみられる。これらは口径が小さく、横ナデ手法を主体とするなど青野・宮出土資料と比べ新相を呈している。11・12・14・15は大形で口縁部内面に加飾がある。11は櫛描波状文、12は棒状工具による円形の刺突文を２列施し、その間に櫛描波状文と扇形文を巡らしている。14は口縁端部に斜行する刻み目文、内面に列点文＋櫛描直線文＋櫛描波状文＋列点文を巡らす。15は円形刺突文を２列配し、その間に櫛描波状文を施している。12・14・15は、口縁形態や文様構成が第Ⅱ様式的であり、古相である。

受口壺(16)　口縁部が内湾して立ち上がる。口唇部に刻み目文、頸部に太い指頭圧痕文凸帯を巡らす。調整は外面箆磨き、内面刷毛である。口径約29cmと大型である。

甕(18・22～25)　18は端部に面をもち、口縁部に一部を上下から押圧して波状部をつくる。21は「はね上げ」口縁である。

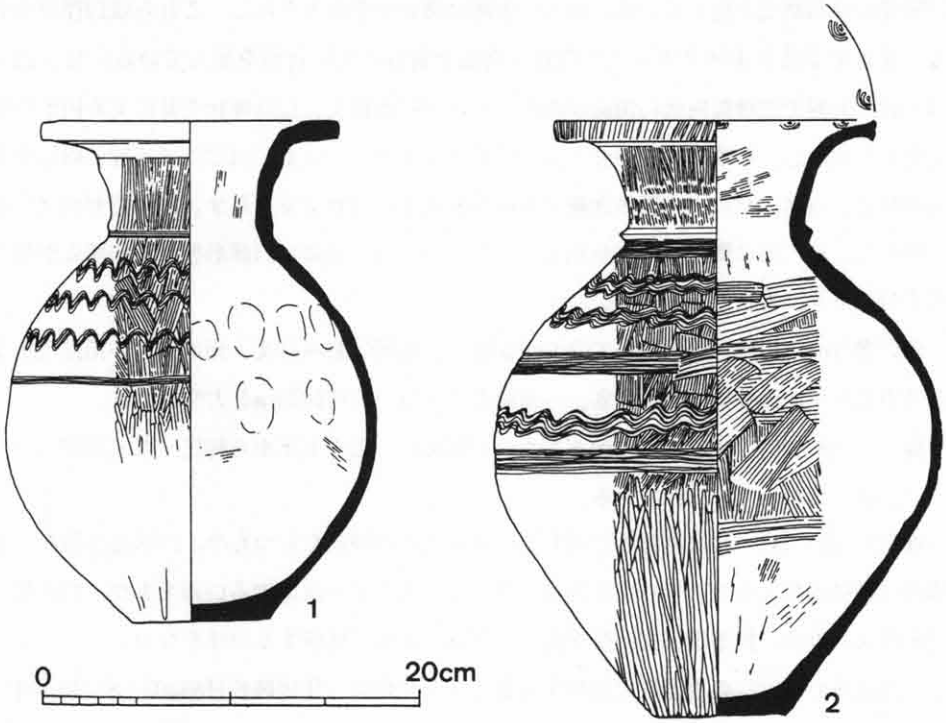
鉢(17・23・24)　17は直線的に立ち上がり直口の口縁部をもつもの。口唇部に刻み目文、体部に櫛描波状文を２帯巡らす。24は内湾して立ち上がり直口する口縁をもつ。口唇部に刻み目文、外面に指頭圧痕文凸帯が巡る。23は屈曲して外傾する口縁をもつ。

志高遺跡では、この土器群に該当する資料として他に、住居跡ＳＨ85202・85210[(注13)]、舟戸地区包含層出土資料、舞鶴市教育委員会が調査した方形周溝墓18・20[(注14)]などがある。住居跡出土資料は小破片に限られるうえ混入も多く器種構成等の詳細は明らかでない。舟戸地区包含層出土資料は一括性に乏しいが、壺にみるべきものがある。参考資料として指摘しておく。

⑧志高遺跡昭和57年度カキ安地区方形周溝墓出土資料(第13図)

カキ安地区では、30基以上の方形周溝墓が検出されている。方形周溝墓２はこのうちの一基で、長辺８ｍ、短辺７ｍ、周溝は幅１ｍ、深さ45cmの規模をもつ。壺が「南東部溝と南西部溝のそれぞれ中央部で」各一点ずつ出土している[(注15)]。２点ともに完存していた。供献土器とみられる。

いずれも広口壺である。１は、球形に近い体部をもち、筒形の頸部から口縁が大きく開く。口縁部は端部・内面を強くナデ、無文である。頸・胴間と体部中央に櫛描直線文を各一帯施し、その間に櫛描波状文を３帯巡らしている。調整は、体部外面上半刷毛、体部下半箆磨き、内面は刷毛後ナデである。口径約16cm、器高約26.6cmを測る。２は、張りのある体部をもつ。口頸部の形状は１と良く似ているが、この個体では端面に若干の拡張がみられる。端面に櫛原体木口による刻み目文、内面に扇形文を施す。頸部に断面三角形貼付凸帯一条、肩部から胴部にかけて櫛描直線文と波状文を施す。体部外面上半刷毛、下半箆磨き。内面は上半刷毛目、下半は箆削りである。口径約17.2cm、器高約31.4cmを測る。



第13図　志高遺跡カキ安地区方形周溝墓２出土遺物

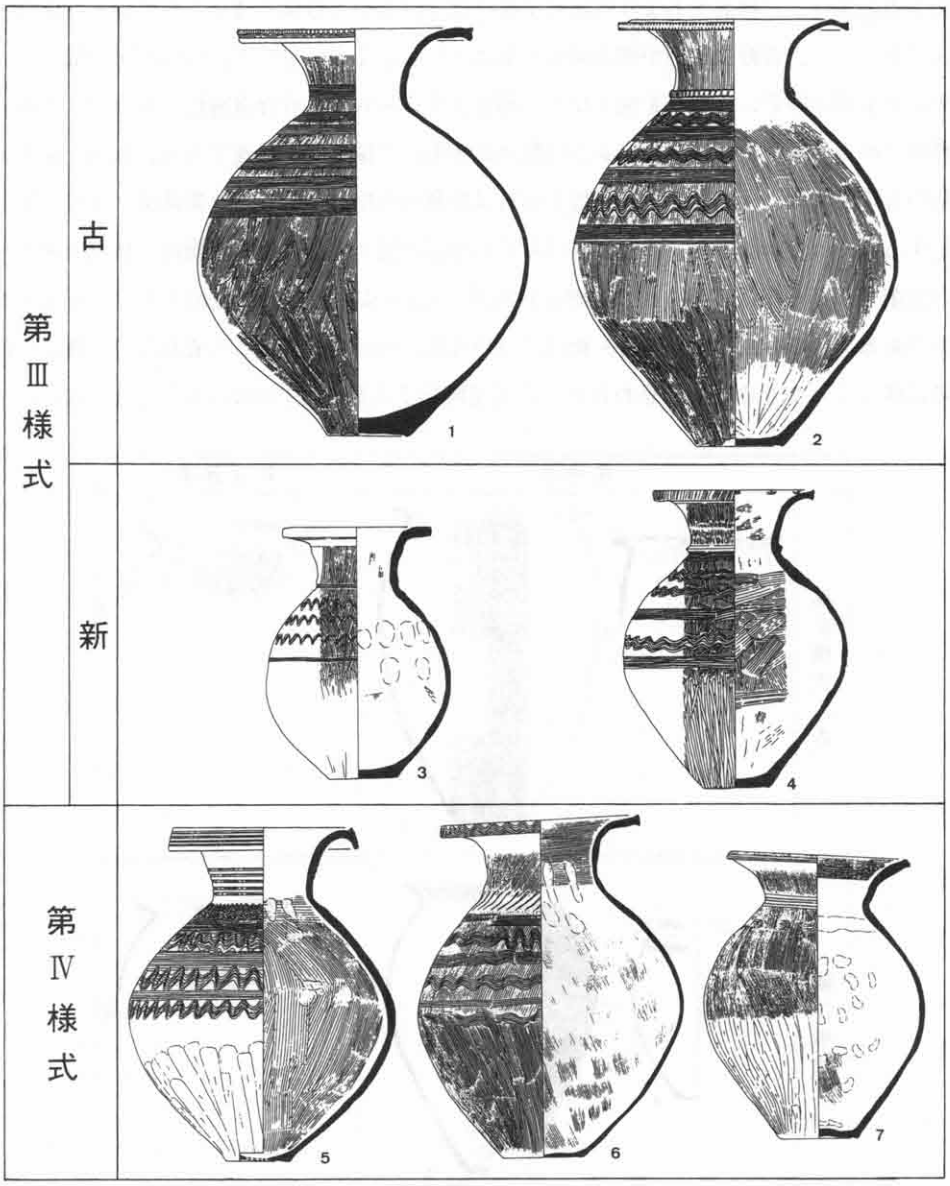
３．第Ⅲ様式土器の古・新

上に提示した資料群は、器種すべてを揃えているものはないが、出土状況からみてそれぞれ一括性を保持しており、資料的価値は高い。

これらの資料のうち①～⑥群は、器種構成、器種相互の形態・文様構成に幾つかの共通点が認められる。第一に、円筒状の頸部から大きく外反する口縁部をもつ広口壺の存在である(①～③・⑥)。これらは口縁部成形や頸部の長短などに差異をみせているがおおむね同一の形態を有しており、多くは口縁端部に刻み目や列点文、羽状文、斜格子文などの加飾がみられる。口縁部内面への加飾、頸部外面の貼付凸帯文(断面三角形凸帯文・指頭圧痕凸帯文)も共通する要素の一つである。第二に、直口する鉢形土器の存在である(①・③・⑤・⑦)。底部から直線的に立ち上がるものと内湾するものとがあるが、いずれも端部上端を強くナデ、しっかりした端面を作る。口縁部に刻み目文、指頭圧痕文凸帯のいずれかの文様を有している。第三に、小型・長胴の粗製壺の存在である(①・⑤・⑥)。口縁部形態に差異があるが長胴傾向・無文傾向を示す点で共通する。第四に文様について。広口壺・鉢などの口縁部は箆ないしは櫛状工具を用いた刻み目文が多用される。また、壺の頸部には断面三角形凸帯文・指頭圧痕凸帯文がみられ、体部の主たる文様は櫛描直線文・

波状文である。円形浮文や刺突文も散見し多様性を見せているが、これらの資料群には凹線文は一切含まれておらず、この点に最大の特徴がある。

以上の諸点から、これらはほぼ同時期の所産とみることができよう。帰属時期については、文様が櫛描文を主体とし凹線文を含まない事、広口壺・受口壺・鉢・高杯についてみると、摂津地域第Ⅲ様式古段階として評価されている田能遺跡第４次調査区鋳型ピット・

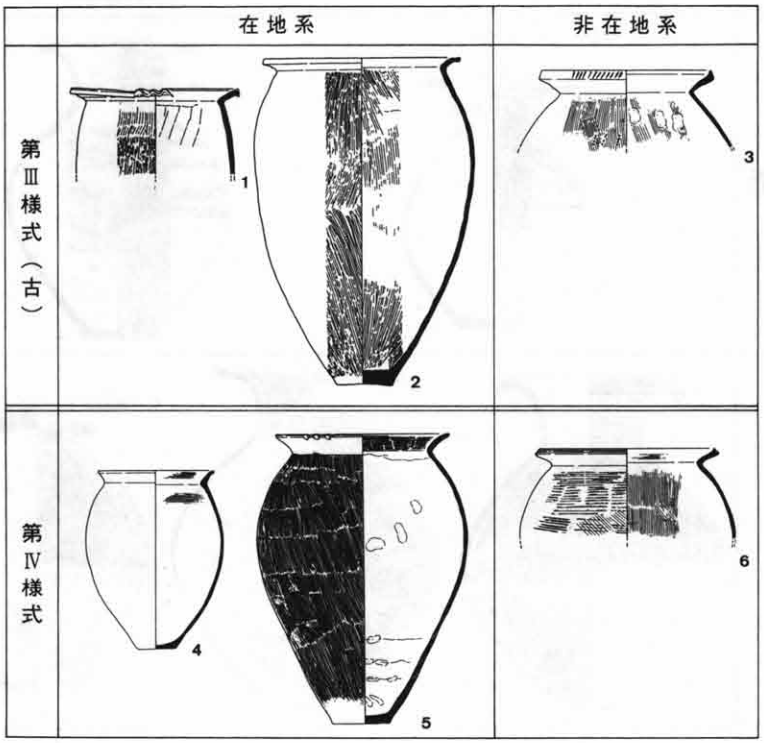


第14図　広口壺の変遷

1・2. 青野遺跡第12次調査ＳＤ202　　3・4. 志高遺跡カキ安地区方形周溝墓２
5. 三宅遺跡　　6・7. 興遺跡

ピット82・土坑２出土資料[注16]と類似する形態・文様を有していることなどから、大方これに並行するものと判断される。それぞれの資料群は器種に偏りがあるが、青野遺跡では壺・鉢に完形品を含む良好な個体を有しており、宮遺跡では甕が充実している。各資料を足し引きすることによって、当該地域の第Ⅲ様式古段階を設定し得るものと考える。

ところで、⑦に示した志高遺跡カキ安地区方形周溝墓２出土の壺は、青野遺跡ＳＤ202出土壺に比べ、口縁部があまり外反せず簡略化されており器体も矮小化している。調整手法においても、青野遺跡例が刷毛調整を主体としているのに対して、口縁部・頸部に横ナデ、下半部に顕著に篦削りを施すなどの相違点がみられる。青野遺跡例にも篦削り状の調整が認められるが、先に記したように板状原体木口で掻き取る程度であり、器体を減ずる程のものではない。方形周溝墓２出土資料は墳墓への供献土器であり集落出土資料と同一視することはできないが、この資料にみる口頸部形態・文様の簡略化傾向、体部内面下半の篦削りの存在等は、明らかに青野ＳＤ202出土資料より形式的に後出することを示すものである。第Ⅲ様式を大きく古・新の二つの段階に分けた場合、この資料はその新しい段階に置くことができるもの思われる。志高遺跡第７次調査ＳＤ86240出土資料の内、12・



第15図　甕の変遷
1・2.宮遺跡ＳＤ19　3.青野遺跡第12次ＳＤ202　4～6.興遺跡

14・15を除く壺形土器は、口径が小さく横ナデ手法が卓越している。カキ安地区方形周溝墓2出土資料と類似しており、同様の時期に属するものと考えておきたい。

4．おわりに

以上、土器資料を例示し、①～⑥群が第Ⅲ様式古段階に、⑦群の一部と⑧群が新段階に属するものと考えた。古段階については各資料群を相互に補完することによって一程度内容を把握できるが、新段階資料は完形の広口壺が二点と破片資料があるのみで詳細は明らかでない。新相を示す土器群の組成と凹線文採用端緒の状況がどのようなものであるのかという点については現時点では資料が無く、今後の調査に期待するほかはない。

以下、気付いた事柄を列記して結びとしたい。

①由良川中・下流域の第Ⅲ様式古段階の広口壺は、武庫川・猪名川水系の摂津地方西部地域と形態・文様において近親性がみられ、当地域は「近畿地方北部の凸帯文地帯」の一翼[注17]を担うものと思われる。ただし、丹後地方の峰山市途中ヶ丘遺跡[注18]・弥栄町奈具遺跡[注19]では壺頸部に凸帯文を盛用するようだが、当地域では2～3条と少条のものが主体となるようであり、地域性を考慮した検討が必要となろう。

②広口壺には体部形態が球形のもの(前編第1図1)と中位が張るもの(同第1図2)とがある。これらの型式的変化は、口縁部形態と施文の簡略化を中心として推移し、やがて口縁部端面・頸部に凹線文が施されるようになり第Ⅳ様式へと移行する。凹線文は志高遺跡方形周溝墓2に並行する段階ないしはその直後に、直口壺や高杯などの特定器種に凹線文が出現するものと思われる。

③広口壺は、上で記したように摂津地方西部地域出土資料と形態を同じくするものがあり帰属時期を知る好資料となっている。だが、甕についてみると摂津地域ではハネ上げ口縁もしくはそれに近い形状をなすのに対して[注20]、当地域では端面を丸くあるいは狭い面をもつ長胴傾向のものが主体をなす。これらは、強い在地性を有しており、在地型甕として位置づけられよう。ハネ上げ口縁部も認められるが、これら在地型甕とは胎土・調整手法を異にしており数も少ない。また、在地型の甕には口縁部を上下から押圧して波状に作るものがみられ、特徴となっている。これは、3ないし4個一対の波状部を一単位として口縁の3ないし4箇所に施すものである[注21]。

長胴傾向の甕と口縁部への波状施文は、隣接する地域に位置する兵庫県春日町七日市遺跡などでも確認されており[注22]、中丹地域の地域的特色をなすものであろう。この特色は第Ⅳ様式にも引き継がれ、長胴傾向の在地型甕を中心とした展開がみられる。その中でハネ上げ口縁を有する非在地型甕との折衷型式が現われるが、これらはあくまで傍系である。器

面調整も刷毛調整を盛用し、叩き成形痕をとどめるものは稀である。口縁部の押圧文は、押圧から箆ないし櫛状工具の木口部分による刻みへと変化しつつも、3～5個一対で口縁の3ないし4箇所等間という原則を保持し続ける。

最後に、本稿作成にあたり、奈良国立文化財研究所深澤芳樹氏・綾部市教育委員会近澤豊明氏・綾部市立吉美小学校教諭中村孝行氏・舞鶴市教育委員会吉岡博之氏・京都府教育庁文化財保護課肥後弘幸氏・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター辻本和美氏・石井清司氏からは事実関係について多くの教示を得た。記して謝意を表します。＜1990.10.31＞

本稿は、由良川考古学研究会(代表近澤豊明氏)が企画した会誌への原稿として、1990年10月に提出したものである。数年を経て、なお、刊行のメドが立たないということで、先日、返却されたものである。この間、由良川流域では、舞鶴市桑飼上遺跡の調査が行なわれ、第Ⅲ様式土器に関する資料の増加があったが、未だ、断片的である。本稿が当該地域の弥生土器研究の一助となれば幸いである。

(たしろ・ひろし＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

注10　注3文献　24頁
注11　注3文献　24～25頁
注12　注4文献　349頁
注13　注4と同じ。
注14　『志高遺跡Ⅱ－弥生土器の概要－』　舞鶴市教育委員会　1986
注15　注14と同じ。
注16　『田能遺跡発掘調査報告書』　尼崎市教育委員会　1982
注17　佐原　眞「大和川と淀川」(『古代の日本』5　角川書店)　1970
注18　『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』　峰山町教育委員会　1977
注19　『奈具遺跡発掘調査報告書』　弥栄町教育委員会　1972
注20　森田克行「摂津地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　寺沢　薫・森岡秀人編　木耳社)　1989　112～123頁
注21　第Ⅱ様式の大和型甕には口縁部を棒状工具のようなもので部分的に押圧するものがあるが、これらが形骸化しつつ地域的に遺存したものだろう。
注22　『春日七日市遺跡－確認調査報告書－』　春日七日市遺跡発掘調査団　1984

※掲載図面は、第1～7図を筆者が再実測・製図を行った。第8～13図は各報告書による。

青野遺跡ＳＤ102出土底部(8)(円板充塡による)

平成６年度発掘調査略報

１．長岡京跡左京第332次(7ANEKZ-8地区)

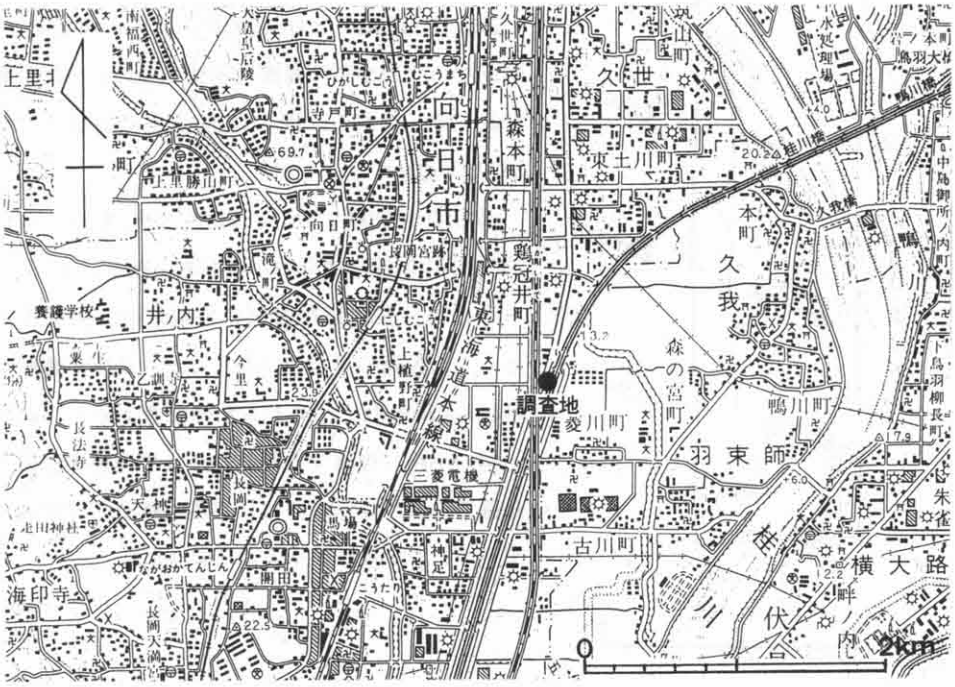
所 在 地　向日市鶏冠井町清水

調査期間　平成６年４月11日～同年６月16日

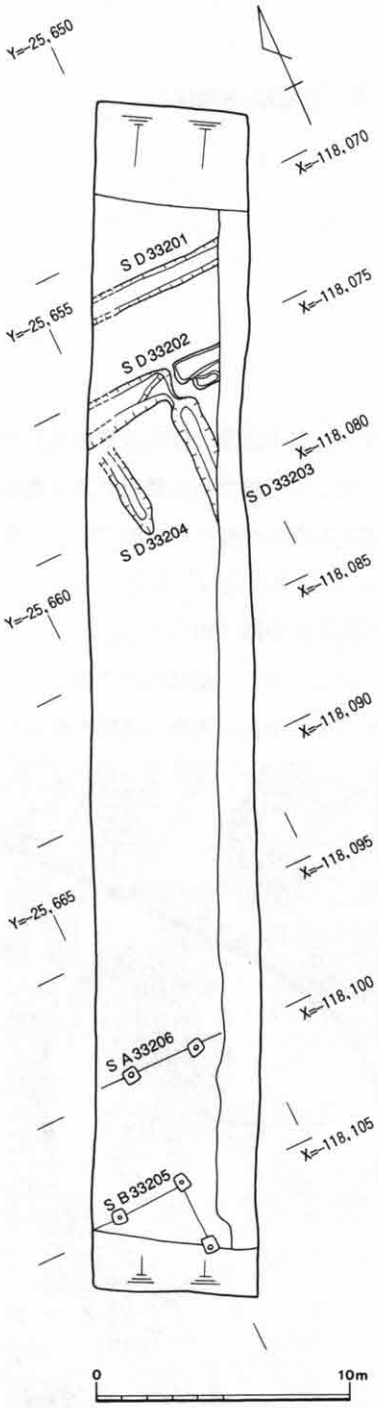
調査面積　約300㎡

はじめに　今回の調査は、名神高速道路拡幅工事に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。調査地は、縄文時代晩期から中世までの遺跡である鶏冠井清水遺跡に含まれる。近接する調査事例には、長岡京跡左京第151次調査がありその際には、二条大路(新条坊三条条間小路)北側溝が検出されている。なお、推定地は、左京三条二坊一町・二条大路で、新条坊呼称では左京三条二坊三町・三条条間小路に相当する。

調査概要　調査区は道路の拡張幅に合わせて、細長く設定された。遺構の検出面は、大きく分けて２面認められた。上層からは東西方向を主体とする中世の素掘り溝群を検出し



第１図　調査地位置図



第２図　下層遺構実測図

た。溝の埋土からは、瓦器椀片・瓦器羽釜片・土師器片が出土している。

下層は、長岡京期の遺構面で、建物跡１か所と溝を４条検出することができた。

掘立柱建物跡ＳＢ33205　方形掘形を持つ掘立柱建物跡である。柱間は、2.7ｍ等間に復原できる。トレンチ南端の柱穴からは、直径約25cmの柱痕が１本検出できた。

柵列ＳＡ33206　ＳＢ33205と柱筋が通らないことから、東西方向の柵列と考えられる。

溝ＳＤ33201　二条大路(新条坊三条条間小路)南側溝と考えられる東西方向の溝である。検出面からの深さは約25cmを測る。溝心における国土座標値は、ｙ=-25,650で、ｘ=-118,072である。

溝ＳＤ33202　ＳＤ33201に並行する溝で、ＳＤ33201との心心間距離は、3.6ｍ(12尺)である。検出部中央は浅くなり、溝は途切れている。

溝ＳＤ33203　ＳＤ33202に直交する南北溝で、東三坊坊間西小路西側溝推定値からの心心間距離が約4.6ｍである。溝の北側で浅くなるがＳＤ33202と連結する。

溝ＳＤ33204　ＳＤ33203に並行する。ＳＤ33202との関係は攪乱のため不明である。

まとめ　長岡京を旧来の平城京型で復原すると、二条大路の推定地にあたるが、長岡京跡左京第151次調査のデータとあわせて考えると、約９ｍ幅の小路に復原できる。これまでの調査結果から論じられているように、二条大路が二町分北にずれることを追認することになった。

(中川和哉)

2．上津屋遺跡

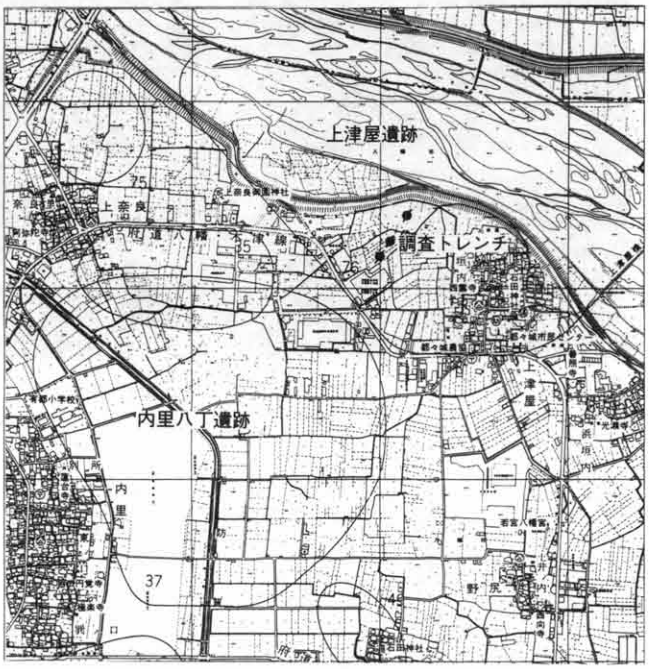
所在地　八幡市上津屋

調査期間　平成６年５月13日～同年５月24日

調査面積　約450㎡

はじめに　上津屋遺跡は、木津川の左岸に位置する遺跡である。この遺跡の下流には、古墳時代集落として有名な木津川河床遺跡があり、さらに南西には弥生時代後期から中世にわたる複合集落遺跡である内里八丁遺跡が広がる。この遺跡は、『八幡市遺跡地図』によれば、東西1,250m×南北800mの広がりをもち、土師器・須恵器などが表面採集されている。しかし、遺跡の内容については、これまで八幡市教育委員会による数回の立会調査があったのみで、情報が不足しているのが現状であった。

この遺跡全体の旧地形は、(財)向日市埋蔵文化財センターの中塚　良氏の地形分類によると、北に現河道、南に現集落の立地する微高地を残す。それ以外は旧河道と氾濫源からなる。今回の調査地は、遺跡推定範囲の中央に位置し、旧河道及び氾濫源にあたる。



調査地位置図(1/20,000)
●は、トレンチの位置を示す。

調査概要　調査は、まず北東から南西方向に幅２～３m・長さ50mのトレンチを３本設け、掘削を行った(北から１・２・３と仮称)。第３トレンチで地震の噴砂を確認したほかは、いずれのトレンチでも遺構・遺物とも検出できなかった。その後各トレンチとも、現地表下から２～３mほ

ど深掘りを行い、層序を確認した。基本層序は、現地表から約20cmほどの耕土層→約50cmほどの灰色～茶褐色の砂質土層→150～200cmの青灰色の粘質土層→黄灰色の砂質土層(粗砂)となっている。

第3トレンチで検出した噴砂は、黄灰色の砂質土層(粗砂)の砂が150m以上噴き上がっているものであるが、なにぶん時期を確定できる材料がない。ただ、木津川河床遺跡や内里八丁遺跡では、1596年の「伏見地震」によってもたらされたと推定される噴砂が確認されている点は注目される。

まとめ　今回の調査では、噴砂以外に顕著な遺構は検出されなかった。上津屋遺跡の中心部分は、現在の集落が立地する微高地上に想定される。

(岸岡貴英)

第2トレンチ全景(南から)

３．燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡

所 在 地　相楽郡木津町大字木津小字宮ノ裏

調査期間　平成５年12月２日～平成６年３月２日、平成６年４月18日～同年７月１日

調査面積　約820㎡

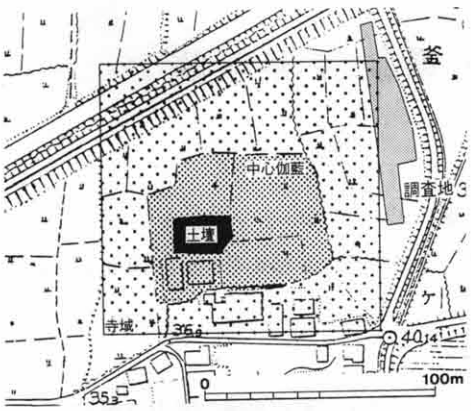
はじめに　この調査は、井関川の河川改修に伴い、住宅・都市整備公団の依頼を受けて実施した。燈籠寺遺跡は、木津町の平野部に東面する丘陵の縁辺にあたり、木津城跡(上之山)を擁する城山から北に派生した尾根筋を中心に展開する遺跡である。今回の調査地は、この遺跡の北端に位置し、地形的には丘陵がおりて木津川沖積低地に移る中間地点に相当する。そして、この地点には古瓦が出土する土壇(寺院の主要堂宇の基壇と推定)が、水田中に残されており、周辺の地形の起伏や畦畔に残る地割りなどから一辺約120mの正方形の寺域をもつ寺院跡が復原されている(燈籠寺廃寺)。

今回の調査対象地は、この燈籠寺廃寺の推定寺域と一部重複し、その東限線が対象区内に入る。このため、寺域東限施設の構造を知ることを一つの目的とし、対象地の西寄りに調査区を設定した。

調査概要　調査の結果、上下２面からなる遺構面を確認した。上層遺構の成立面は地表下1.0～1.4mにみられる安定した土層で構成されている。ただ、その分布をみると調査区の北端部でのみ直接地山が見えており、それ以外は、奈良～中世の遺物を含む整地層が広範に広がっていた。遺構としては、北端の地山面では南北に主軸をもつ素掘り溝とその西方に展開する大小のピット群を検出し、一方、この南面に広がる中世の整地層の上面では不定形の土坑や南北に主軸をとって平行する２条の浅い溝状遺構などを確認した。

下層遺構は、中世の整地層の下面にのみみられ、これを約0.6m掘り下げることによって確認できる河川堆積層である。この河川堆積層は、調査区の北端を除いて広く面的に広がるもので、埋土の組成の違いから大きく２つの領域に分別できる。一つは、調査区の南北両端にみられる青灰色砂礫層で、正確には蛇行する自然河道の縁辺部にみられる下層埋土であるが、同層

第１図　調査地位置図(1/50,000)



第２図　調査区配置図

からは縄文土器が単独でまとまって出土した。一方、この内方に堆積する領域(上層)は、砂礫層に腐植土層が混入しており、内部から７世紀後半～８世紀前半の遺物(土器･瓦･木器)が良好な状態で多く出土した。

まとめ　今回の調査成果を列挙すると、以下の３点に要約できる。

まず、縄文土器の出土は、南山城地域では13例目であり、この地域ではまだ数少ない縄文遺跡として貴重な発見といえる。また、今回の縄文土器は、縄文時代後期の全般(中津～宮滝式)にわたる資料を含んでおり、いずれもその保存状態がよいことから、調査地の近隣に長期間にわたって人々が住んだ「拠点集落」の存在をうかがわせる。

次に、燈籠寺廃寺であるが、今回の検出遺構のうち、調査区北端の地山面に遺存していた遺構群が奈良時代に属する可能性が高い。中でも南北主軸をとる溝は、推定寺域東限線とほぼ一致し、従来の復原案の一端を裏付ける資料になる。一方、出土遺物の面では、多量に出土した奈良時代の遺物の中に軒瓦が少なからず含まれる。これらは、大きく７世紀後半と８世紀に分離できるが、前者はこの寺院が白鳳期に創建されたことを示す物証となる。また、８世紀の瓦は、その多くが恭仁宮大極殿の山城国分僧寺施入の際に新調された瓦と同笵である。このことは、単にこの寺院がやはり同笵瓦を含む高麗寺とともに、国分僧寺と地理的に近いという理由で捉えることもできるが、一方で燈籠寺廃寺に対して古くから考証されてきた「国分尼寺説」を考古学的な側面から補強する要素ともなる。

最後に、上層遺構と認識した南北方向の２条の溝は、幅員６ｍの道路跡の可能性がある。仮に南北主軸の直線道とすると、調査地の南に展開する釜ヶ谷筋とほぼ平行することになるが、近年この谷筋を大和上ツ道の延長であることをつきとめ、そこに古代以来の計画道が存在するという仮説が提唱された(岩井照芳「恭仁京賀世山西道と上ツ道延長道」『京都考古』第76号　1994.4)。この説によると、この幹道は、天平期には恭仁京の左右京を分かつと文献に記された「鹿背山西道」に利用され、さらに中世になっても重要な交通路であったことを論証している。今回検出した道路状遺構は、古代にまでさかのぼりえないが、少なくとも中世に機能していたことを示しており、上記の説を部分的に立証するものとみることもできる。

(伊賀高弘)

４．梅谷瓦窯跡・中ノ島遺跡

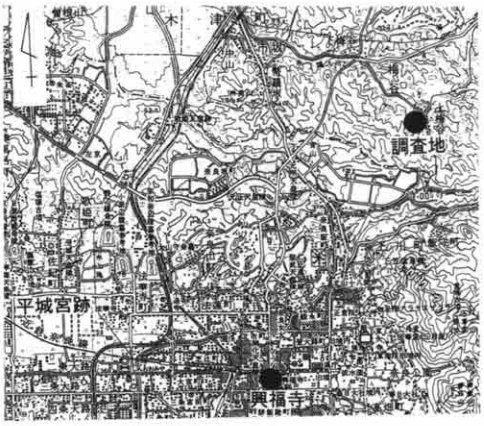
所 在 地　相楽郡木津町大字梅谷小字中ノ島

調査期間　平成５年４月12日～平成６年３月４日

調査面積　約3,000㎡

はじめに　梅谷瓦窯跡は、京都府と奈良県の境界である平城山丘陵の東部から北に向かって分岐する丘陵の先端にあたっており、木津町南東部の山間地に位置する。梅谷瓦窯跡及び隣接の中ノ島遺跡は、昭和56年度に京都府教育委員会が実施した分布調査によって、軒平瓦や布目を持つ丸瓦・平瓦が採取されたことから、奈良の興福寺所用瓦を焼いた窯がこの付近にあることが推定された。その後、昭和60年度の試掘調査において、梅谷瓦窯跡の位置する丘陵の裾付近で、奈良時代の瓦窯関連の灰原とテラス状の地形及び溝状の落ち込みなどが、須恵器・土師器及び多量の瓦片とともに確認された。また、近世以降の新田開発による水田面も検出された。平成５年度の調査は、昭和60年度調査の成果を受けて、梅谷瓦窯跡の窯の位置と、その基数及び関連施設の確認を目的に試掘調査を行った。この調査は、住宅・都市整備公団関西支社(関西文化学術研究都市整備局)による造成事業に伴い、同公団の依頼を受けて実施した。以下に、昨年度の調査結果を含めて梅谷瓦窯跡の概要を報告する。

調査概要　平成５年度の調査では、中ノ島遺跡では６か所、梅谷遺跡では11か所のトレンチを設置した。その結果、中ノ島遺跡では、近世以降の水田跡や奈良時代以後の自然流路を検出し、梅谷瓦窯跡では、興福寺創建瓦に関連する７基の瓦窯跡(登り窯５基、平窯２基)、土採り跡と考えられる大きな土坑などを検出した。北向き斜面の中腹に造られた７基の窯は、東から西にかけて、ほぼ整然と計画的に配置されている。報告の便宜上、東から順に番号で窯の状況を述べる。１～７号窯の７基の窯は、丘陵斜面に1.5mのほぼ等間隔に並んでおり、近接した時期に窯を操業したものと思われる。



調査地位置図(1/100,000)

東端の１号窯から中ほどの５号窯までは、おそらく登り窯の形態を持つと考えている群である。残りの西端の２基は平窯の特徴を備えている。１号窯は、全体の1/4程度が残るのみで、これを含む登り窯２基(１・２号窯)、平窯１基(７号窯)について窯の実態を確認するために調査を実施した。その結果、２号窯は、窯の全長約4.2m・最大幅2.3mで、煙出し部(直径0.9m)・焼成部(長さ1.75m)・燃焼部(長さ1.55m)からなる登り窯で、丘陵斜面を一部掘り込んだ半地下式(はんちかしき)登り窯であることが明らかとなった。生瓦を焼く焼成部には、窯の長軸(主軸)に直交するように平瓦を積みあげており、傾斜面に平瓦を蛇腹状に積みあげ床面を作っている。なお、２号窯は、数回の修復作業が行われたことが推定でき、蛇腹状に積み上げた平瓦の下層に瓦と粘土を使って堅く焼き絞まった床面があることを確認した。また、焼成部と燃焼部の間には、明瞭な段差があり、その部分の中央には、おおぶりの自然石が据えられていた。燃焼部の床面近くには同様の大きさの表面が焼けた自然石が４個体出土しており、自然石を積み重ねた分焔柱状の支柱が設けられていたと考えている。燃焼部の側壁には補修のために丸瓦がスサ入り粘土で固定されている部分もあり、床面の改修状況とともに、数回に及ぶ窯の操業が確認できる。窯体内からは、丸・平瓦のほか、軒瓦(興福寺創建瓦)が出土している。

７号窯は、窯の全長約4.35m・最大幅2.2m、焼成部の長さ約2.6m、燃焼部の長さ約1.15mを測る平窯である。この平窯は、燃焼部と焼成部の境に高さ50cmの段差がある。この段差部分に丸瓦などを縦に並べて、粘土で固定して壁面を強化している。焼成部はほぼ水平で、瓦の破片を全面に敷きつめて床面をつくる。煙出し部は直線的にのびる奥壁の両端と中央の３か所をトンネル状に刳り抜いたものである。焼成部の壁面は、平瓦とスサ入り粘土を交互に積み重ねた構造である。７号窯の窯体構造とよく似た瓦窯には、その製品を藤原京へ供給した奈良県橿原市日高山(ひだかやま)瓦窯がある。

現在、昨年度に実施した２号窯の下層床面の調査と、前年度に試掘調査するにとどめた残りの４基の窯の内、３・４号窯の２基及び灰原について調査を実施している。３号窯は、平面形や規模は２号窯と同様であるが、２号窯のような燃焼部と焼成部間に明瞭な段差がなく、ゆるやかな傾斜をもってほぼ一続きになっている。また、焼成部と煙道部の間には丸瓦を積み上げた障壁を設けて、煙道部を狭くする改修を行っている。同様の障壁は２・４号窯でも確認している。４号窯は２号窯のような平面形ではなく、須恵器窯に似た一般的な登り窯に近い様相を示しており、丸瓦を用いた階段状の焼成部床面が部分的に確認できている。隣りの５号窯も４号窯に近い形状であるため、梅谷瓦窯跡群では２基１グループで窯が造られた可能性がある。いずれにせよ、現在は調査途中のため、詳細は次回の報告に委ねたい。

まとめ　前回と今回の調査成果を要約すると、以下のとおりである。

①梅谷瓦窯は、５基の登り窯と２基の平窯の合計７基からなることが明らかとなった。並行する７基の窯は、その窯の配列から、ほぼ近接した時期に操業された窯で、ほぼ同時期に、異なった窯構造のものが併存している。

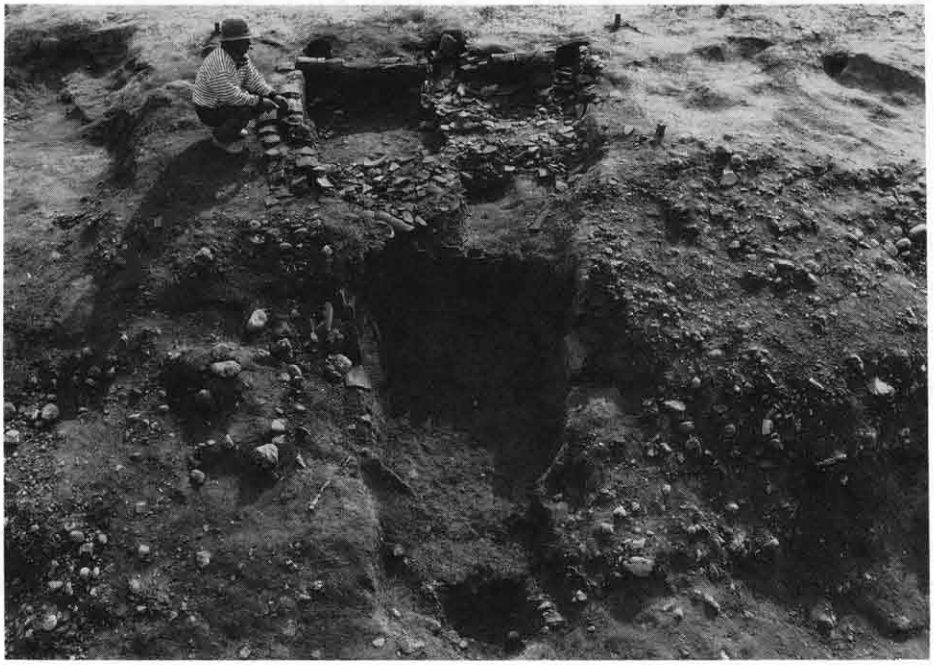
②５基の登り窯のうち、２号窯は、一般的な登り窯とは異なり、窯体の幅に対して長さが短い特異な平面形態のもので、登り窯から平窯への過渡的な構造の窯である。また、一群の窯の構造及び改造のようすは、瓦窯の変遷を追える貴重な遺跡である。２号窯の窯は、これまでの瓦陶兼業窯（がとうけんぎょうよう）から、もっぱら瓦を焼くために改良されたもので、よく似た窯構造のものには木津町瀬後谷瓦窯がある。

③７号窯の平窯は、藤原京の瓦を焼いたと考えられている橿原市日高山瓦窯に窯構造が近似しており、それらの瓦工人の技術をそのまま継承している。

④梅谷瓦窯で焼かれた瓦、特に軒瓦類は奈良興福寺創建瓦とされているものがほとんどであり、興福寺の造営が開始されたとされる和銅３(710)年頃、すなわち８世紀初頭に操業された瓦窯である。

（有井広幸）

２号窯全景（北から）



7号窯全景(北から)

研 究 ノ ー ト

軒瓦から見た恭仁の皇后宮

—恭仁宮北東周辺部の問題—

小 山 雅 人

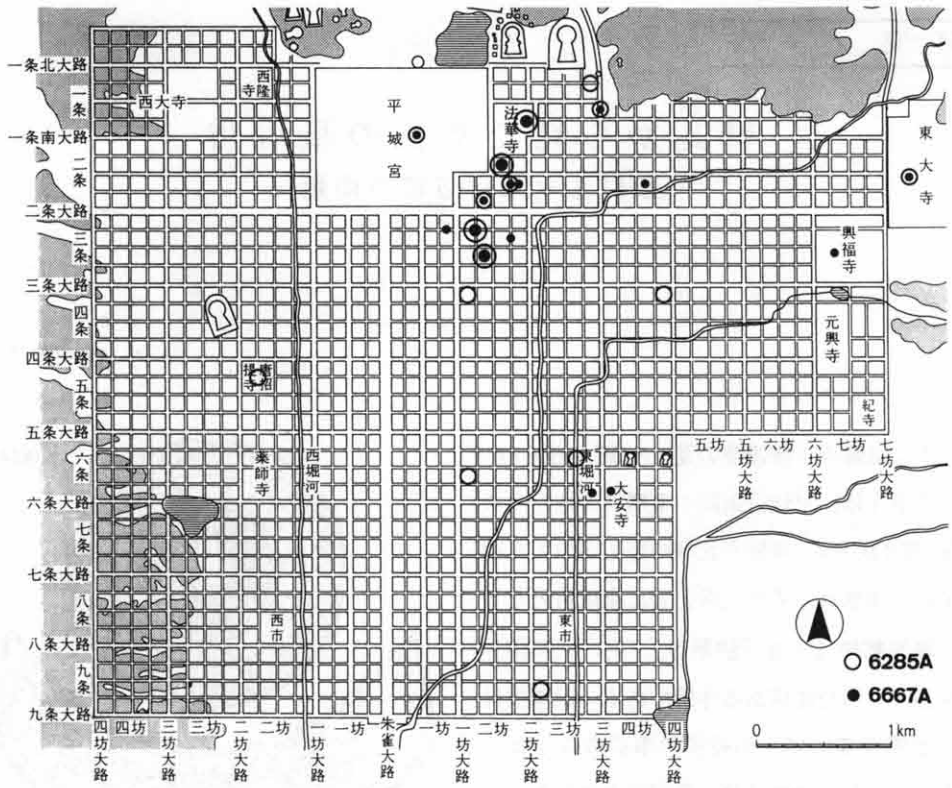
1．法華寺下層遺跡の瓦　6285A-6667A

法華寺は、平城宮東院の東側に寺地を占める(第4図11)。藤原不比等の邸宅が娘の光明子に伝領され、その立后と共に皇后宮となり平城還都後に宮寺「法華寺」、更に大和国分尼寺となった由緒ある寺院である。旧境内は住宅建設等に伴う小規模の事前調査が多いが、かなりの次数に及ぶ発掘調査が行われている。法華寺の金堂・講堂・鐘楼などの遺構も重要な成果であるが、本稿にかかわりがあるのは、その整地層の下層の建物群や溝などに伴う軒瓦である。この法華寺前身建物こそ皇后宮で、その所用瓦が平城宮6285A型式軒丸瓦と平城宮6667A型式軒平瓦(以下、「平城宮」「型式」を略す)の組み合わせ(第1図)であったことは、確実のようである(注1)。そして、これらの瓦が出土した奈良山の歌姫西瓦窯(第4図9)がその生産地と考えられている。

第1図　平城宮6285A－6667A型式

軒丸瓦6285Aは、鋸歯文縁・珠文帯と複弁八葉、1＋6の蓮子の中房から成る瓦当文様をもつ。6284系に極めて近似するが、花弁部分がやや隆起する。一方、軒平瓦6667Aは、珠文帯と4転する均整唐草文からなる瓦当文様である。6691A(恭仁宮KH01型式)の直接の祖形と考えられ、よく似ているが、中心飾りの垂飾りの軸部に違いが明瞭に現れ、また唐草文様の曲線は6667Aの方がより流麗である(注2)。

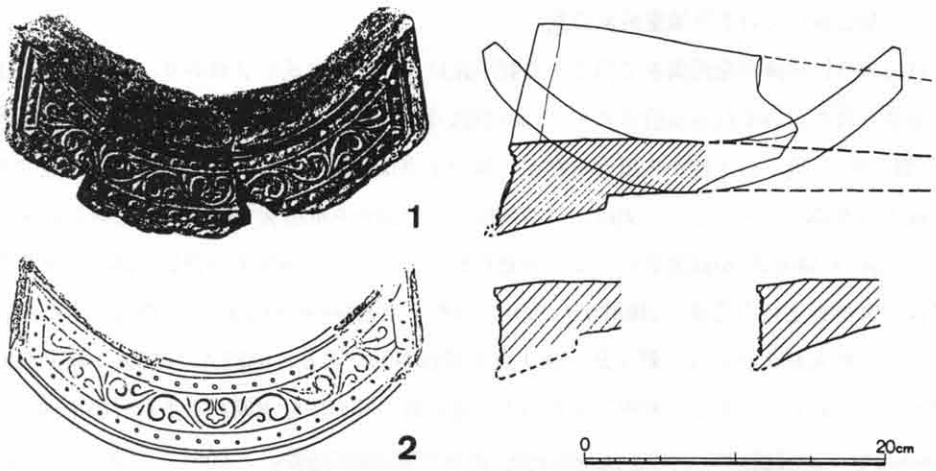
軒丸瓦6285Aと軒平瓦6667Aは、平城宮で出土はするが、宮内での出土量全体からみると僅か(1985年3月までに、33点と16点)であり、両者は組み合っていない(注3)。京内では、両者の組み合わせは法華寺とその南の阿弥陀浄土院(第4図12)で最も多量に出土し、次いで



第２図　平城京内の6285Ａと6667Ａの分布

国の特別史跡に指定された左京三条二坊六坪(同14)の各々22点と39点[注4]と、長屋王邸宅(同13)として知られる左京三条二坊一・二・七・八坪での出土数(９点と25点[注5])が目立つ。他に、両者が共伴した例は、東三坊大路(１点と２点[注6])、左京二条二坊五坪(１点と３点[注7])、同十一・十四坪境小路[注8]、三条二坊十・十五坪[注9]に見られるが、出土数は少ない。また、両者が共伴しない出土例がそれぞれ数か所づつあるが、殆ど唯１点の出土である。ただし、左京一条三坊十五・十六坪で6285Ａが４点[注10]、右京三条二坊十五坪で6285Ａが５点[注11]まとまって出土したことが注意される(第２図参照)。

6285Ａ－6667Ａの組み合わせは、左京三条二坊六坪の奈良時代前半の主要な瓦である。調査報告によれば、この六坪出土の軒瓦(第３図１)に比べて、歌姫西瓦窯の製品は笵の摩耗が進み、調整技法や色調･焼成も異なることから、同笵ではあるが、六坪の瓦は歌姫西に先行する別の窯の製品であると指摘されている。六坪の瓦は、むしろ音如ヶ谷瓦窯(第４図８)に混入したと考えられる瓦に似ているので、この窯の近くの未知の窯から供給されたらしい[注12]。一方、法華寺下層の軒平瓦6667Ａに見られる瓦当部周囲を縄叩き成形する技法は、歌姫西瓦窯特有と認定されているので[注13]、次のような図式が可能となる(第３図参照)。



第３図　6667型式軒平瓦
1：平城京左京三条二坊六坪，2：大畠遺跡(注12参照)

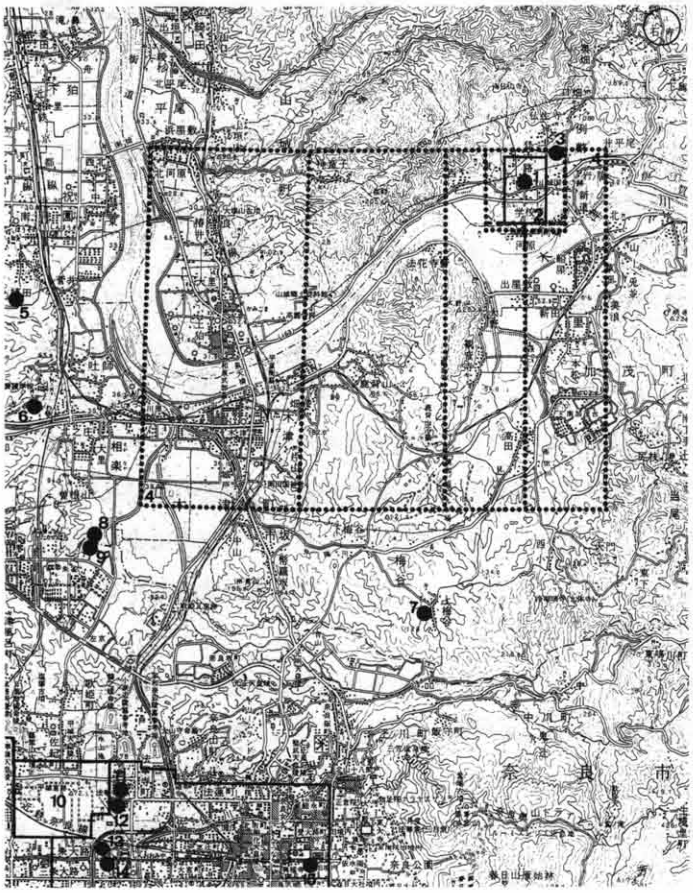
Ａ期　未知の瓦窯(顎の長い段顎・縄叩きなし)――(供給)→左京三条二坊六坪
↓(笵の傷・摩耗の進行)
Ｂ期　歌姫西瓦窯(顎の短い段顎/曲線顎・縄叩き)――(供給)→皇后宮

つまり、6285Ａ-6667Ａは、皇后宮が初現ではなく、左京三条二坊六坪の特別史跡の庭園に先行する時期の邸宅用に新調された瓦であったわけである。6285Ａ-6667Ａの組み合わせを皇后宮所用瓦に充て、その年代を光明子立后の年、天平元年(729)とする森　郁夫氏の説[注14]に対して、毛利光俊彦氏は瓦の年代観から平城宮瓦編年Ⅱ期前半(721頃～729頃)に置き、不比等の没後まもなく旧邸改修に用いられた可能性が強く、笵型の傷が進行したものも出土しているので、立后後も使用されたと見ている[注15]。しかし、上記の図式が成立するなら、Ａ期を瓦が新調された時期とみて720年代、そして、生産地も供給先も変わったＢ期を天平元年以降と考えてよいであろう。

Ａ期の供給先、左京三条二坊六坪は上記の長屋王の４坪を占める邸宅の坊間路を隔てた南隣で、どちらからも当の瓦6285Ａ-6667Ａが多く出土している。Ａ期は長屋王が右大臣、左大臣として政界の筆頭にあった最後の10年間に相当する。いわゆる長屋王の変は光明子立后の年の２月のことである。長屋王が政権を握っていた時期、南隣の六坪の建物に、新調された軒瓦6285Ａ-6667Ａが主要な瓦(軒丸瓦の100%、軒平瓦の91%[注16])として使用されており、長屋王の邸宅にも一部(軒丸瓦の7%、軒平瓦の16.5%[注17])が使われていた。ところが変の直後のＢ期には、同じ瓦笵を使って、別の工人の手が作り、別の窯(歌姫西瓦窯)で焼いた軒瓦が今度は皇后宮の屋根を飾ったのである。

2．恭仁京における平城皇后宮の瓦

最近の恭仁宮跡の発掘調査で出土した軒平瓦に、6667A型式が2点あり、新たにKH19と命名された[注18]。いずれも皇后宮タイプ(顎の短い段顎)である。平成5年度には、宮東面大垣(第4図2)近くの土坑から出土したが、他の1点は宮東北部(京外か)の小字石ヶ辻での平成4年度調査で出土した。実は、この地区では以前から6667A(KH19)とこれに組み合う6285A(KM03B)が採集されたことが知られている。昭和49年度の恭仁宮跡の踏査報告[注19]には、宮域推定地の北東(大極殿から650m)の石ヶ辻遺跡(第4図3)から農道工事の際に出土した軒丸瓦2種2点・軒平瓦2種4点が報告されており、6285A-6667Aの組み合わせがここにあるのである。軒平瓦4点の内、恭仁宮以後の国分寺期の1点以外のすべてが6667Aであることは、工事中の出土という事情を考慮しても、この型式の瓦を主体的に使用した建物がここにあったことを推察させるのに充分である。



第4図　関係遺跡位置図(10万分の1)

1. 恭仁宮大極殿跡　2. 宮大垣　**3. 石ヶ辻遺跡**
4. 恭仁京(足利健亮氏案)　5. 畑ノ前遺跡　6. 樋ノ口遺跡
7. 梅谷瓦窯　8. 音如ヶ谷瓦窯　9. 歌姫西瓦窯
10. 平城宮跡　11. 法華寺　12. 法華寺阿弥陀浄土院
13. 長屋王邸宅　14. 平城京左京三条二坊六坪　15. 興福寺

石ヶ辻遺跡の軒丸瓦の1点は、6667Aと組み合う6285Aである。この瓦は、発掘調査では出土していないが、京都国立博物館所蔵品によって恭仁宮KM03Bとして型式認定されている[注20]。石ヶ辻から出土したもう1点の軒丸瓦は、6301Aである。この瓦は最近発掘調査が行われた木津町梅谷瓦窯(第4図7)の産で、興福寺(同15)の創建瓦であるが、同寺以

外では平城宮・京で出土していない。唯一の例外がほかならぬ法華寺である。[注21]

ちなみに、歌姫西瓦窯で生産された小型の軒瓦の組み合わせに6313C-6685Bがあるが、恭仁宮跡でもこの組み合わせで表面採集され、瓦当面に縄目を残す軒平瓦6685Bのみが恭仁小学校に保管されている。[注22]

これらの瓦の存在は、平城京から運ばれて恭仁宮の造営に使われた軒瓦が「平城の大極殿併びに歩廊を壊ちて」(『続日本紀』天平15年12月26日条)得られたものだけではなかったことを示唆している。6285A-6667Aの組み合わせは、先に触れたように平城宮での出土率はごく低く、皇后宮、あるいは歌姫西瓦窯から運ばれたように見える。小型の6313C-6685Bの組み合わせも同じ瓦窯の製品である。また、興福寺創建の軒丸瓦6301Aが法華寺からしか出土しない点は、藤原氏の皇后と藤原氏の氏寺との関係によるものであろうし、この瓦も皇后宮経由で恭仁の地に来たものと考えられる。

更に、皇后宮の軒瓦が石ヶ辻に集中している事実は、皇后宮(法華寺前身建物)そのものをこの地に移建した可能性をも示しているのである。『続日本紀』の天平14年2月1日条の「皇后宮に幸して群臣を宴す」とある皇后宮がこれであろう。

3．恭仁宮北東周辺部の問題　―まとめにかえて―

石ヶ辻は甕原を見下ろす仏生寺の集落の東南にあたり、きわめて眺望の良い所である。この辺りは「城の東北にあり」という「石原宮/石原宮楼」の可能性も指摘されているが、[注23]石原宮については、更に東北の奥畑の石寺(第4図右上隅の○印)とする説、[注24]あるいは仏生寺集落の西の扇状地に推定される「城北の苑」の一施設と見る意見もある。[注25]さらに平成4年度の調査では建物跡も検出され、調査担当者は、「宮の四周の中では最も安定した地形を呈する所であり、京域が設定されていたとすれば、いち早く官人層の邸宅が設けられたと考えられるところ」から、「その邸宅に関するもの」との可能性を指摘している。[注26]いずれにしても、この石ヶ辻あたりは、恭仁宮の周辺部にありながら、多くの瓦や土器が散布しており、眺望の良さも合わせ、極めて重要な地区であることは衆目の一致するところであろう。そして、出土した軒瓦の素姓等の検討による限り、石ヶ辻遺跡は、平城京から恭仁京に移建された「皇后宮」跡という結論に、現段階では最も自然に導かれるのである。

(こやま・まさと＝当センター調査第1課課長補佐兼資料係長)

注1　『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』昭和51年度(奈良国立文化財研究所)　1977，38頁

注2　毛利光俊彦「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」(『平城宮発掘調査報告』XⅢ　内裏の調査Ⅱ　奈良国立文化財研究所)　1991，258頁と291頁参照。

注3　杉山　洋「瓦磚類」(『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』　奈良国立文化財研究所)

1986，68頁

注４　同上書，別表２と別表３，101-2頁。

注５　花谷　浩「左京三条一坊一・二・七・八坪の調査」（『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』昭和63年度　奈良国立文化財研究所）　1989，表６と表７，65-66頁

注６　『平城京左京一条三坊の調査』（奈良国立文化財研究所）　1974，170，172頁

注７　小池伸彦「平城京左京二条二坊五坪と二条大路の調査　第198次Ｂ・Ｃ区，200次補足，204次」（『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1989年度　奈良国立文化財研究所）　1990，表６，48頁

注８　西崎卓哉「平城京左京二条二坊十一・十四坪境小路の調査　第151次」（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和63年度　奈良市教育委員会）　1989，20頁

注９　『平城京左京三条二坊』（奈良国立文化財研究所）　1975，24頁

注10　上掲書（注６），170頁

注11　中井　公ほか「平城京右京三条二坊十五坪の調査　第200・213-1・2・3次」（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成２年度　奈良市教育委員会）　1991，14頁

注12　杉山　洋、上掲書（注３），65-6頁。音如ヶ谷に隣接する大畠遺跡からも6667Ａが出土した（平良泰久「考古編」〔『木津町史』資料編Ⅰ　木津町〕1984，41頁と図28）。この瓦も「未知の窯」の製品であると同時に、短い段顎と曲線顎が共存している点でも皇后宮所用瓦と共通する（佐川正敏「法華寺境内の調査　第215-15次」〔『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　奈良国立文化財研究所〕1991，130頁参照）。

注13　同上書，66頁；上掲書（注２），313頁

注14　森　郁夫「八世紀の造瓦体制」（『歴史考古学を考える』1　帝塚山考古学研究所）　1987，223-5頁

注15　毛利光俊彦、上掲書（注２），331頁

注16　杉山　洋、上掲書（注３），101-2頁の出土数を新しい編年（注２文献329頁以下）で操作した。

注17　注５に同じ。

注18　森下　衛「平成５年度恭仁宮跡発掘調査概報」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1994　京都府教育委員会）　1994，18-21頁，第14図の４と５。森下氏には、瓦の実見を許されただけでなく、最近の調査成果等について詳しい御教示を賜った。

注19　高橋美久二「恭仁宮跡昭和49年度発掘調査概報」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1975　京都府教育委員会）　1975，24頁：第10図

注20　上原真人『恭仁宮跡発掘調査報告（瓦編）』（京都府教育委員会　1984），5-6頁。尚、京都府木津町と精華町にまたがる樋ノ口遺跡（第４図６）から４点の出土を見ている（伊野近富「樋ノ口遺跡発掘調査概要」〔『京都府遺跡調査概報』第48冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター〕1992，84頁；第71図93と94）。

注21　島田敏男「法華寺旧境内の調査Ⅱ　第174-22次」（『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』昭和61年度　奈良国立文化財研究所）　1987，87頁：第55図。尚、京都府精華町の畑ノ前遺跡（第４図５）からも１点出土している（植山　茂「畑ノ前遺跡　発掘区出土瓦」〔『精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』　古代學協會　1987〕，173頁：第151図３）。

注22　恭仁宮ＫＨ12：上原真人、上掲書（注20），24頁，及び同書注11参照。

注23　高橋美久二、上掲書（注19）、23頁

注24　恭仁尋常高等小学校編『恭仁京誌』（瓶原村役場）　1933，8頁

注25　足利健亮「左京の内外と条里制」（『加茂町史』第一巻古代・中世編　加茂町）1988，173-4頁

注26　森下　衛、上掲書（注18），33頁；31～32頁参照。

府内遺跡紹介

63. 光明山寺跡

光明山寺は、京都府相楽郡山城町綺田光明仙に所在する山岳寺院である。現在は、すでに廃絶しているため、かつて寺院のあったところが遺跡として残っているにすぎない。詳しい縁起類をはじめ、古文書類も残されていないので、いつ頃創建されたか、どのような歴史を持っていたかわからず、わずかな断片史料から復原されているのが現状である。

創建については、『笠置寺縁起』の中に、天武朝に役行者(えんのぎょうじゃ)によって建立されたとあるのが最も古い。しかし、後述するように、これまでの発掘調査の成果からみる限り、7世紀後半までさかのぼる考古資料はみられない。今後、発見される可能性はあるかもしれないが、現時点ではこの伝説を採ることはできない。また、『興福寺官務牒疏(かんむちょうそ)』(1441年)では、「宇多天皇勅願、廣澤寛朝僧正之開基、本尊藥師佛、然永承四年再建、弘寛僧都也」とあり、9世紀末から10世紀初頭頃の創建と伝える。史料上の初見は『東大寺要録』(1106年)で、第六末寺章第九のところに「光明山寺、在山城國、東大寺厳珊已講之建立也」とある。東大寺僧の厳珊は、『僧綱補任』から、11世紀初頭の人物と確認できるので、従来は、『興福寺官務牒疏』の寛朝の創建で、厳珊は再興したと考えられてきた。このように、創建をめぐって伝承上に混乱もあり、不明な点が多い。ただ、平安時代末から史料上に散見するようになるので、少なくとも10世紀末頃までには、建立されていたと考えざるをえない。

11世紀中葉以降、光明山寺は、たびたび史料上に姿を見せる。『拾遺往生伝』下巻によれば、前権律師であった永観は、32歳かまたは40歳の時に光明山寺に蟄居(ちっきょ)したことが見えている。これは、11世紀中葉から後半にかけての頃で、この頃には光明山寺は山岳寺院として機能していたことがわかる。また、『高野山往生伝』には、園城寺の住僧で宰相阿闍梨の心覚が25年も光明山に住んだことがみえており、これらの僧侶以外に、『本朝高僧伝』巻十三には明遍が「年三十一、入和之光明山、

遺跡所在地(1/50,000)
●は、推定中心伽藍所在地

絶交菴居、朝命累召、謝恩不起」と出てくる。このように、かなり高名な僧侶が住んだ寺院であることがわかるが、いずれも「蟄居」とか「絶交菴居」とあるように、僧侶にとって外界との接触を避け、修行の場として存在した山岳寺院であったことがわかる。

また、『伝燈広録』後巻には静誉の伝記があり、そこには静誉のことを「城州光明山上人静誉」と記し、「中住石山、後往相樂郡光明山樹一方幢柱名曰光明山流、寺院繁鬱一百二十舎」とある。静誉は、真言宗の一流派である光明山流を開いた僧侶で、この静誉の時に光明山寺の伽藍が百二十舎余りにもなったと伝えている。この記録は近世のもので、記述が正確かどうかわからないが、少なくとも大山岳寺院であったことは認めてもよかろう。

このように、光明山寺では僧侶の修行・蟄居の場所として存在したが、一方では光明山寺の西方に摂関家領荘園が存在するため、領民が狩猟をしていたことが知られている。『東南院文書』長治元(1104)年五月二十五日付けの「右大臣家政所下文案」(『平安遺文』1613号)や、永久五(1117)年一月二十八日付の「関白家政所下文案」(『平安遺文』1866号)によれば、光明山寺では、寺域での狩猟及び樹木伐採の禁止を摂関家に申し入れた。摂関家ではこの申し入れに対して、光明山寺の四至内への領民の狩猟や樹木伐採を目的とした立ち入りを禁止する下文を相楽郡司宛に発給している。このことから、摂関家に対してこのような要求を通す光明山寺の寺院としての大きさがわかる。

源平の合戦のはじめ頃には、以仁王がこの光明山の鳥居前で没したことが『吾妻鏡』などの史料にみえている。この『吾妻鏡』の記述を信頼すれば、光明山寺には鳥居前と称するところがあったことになり、光明山寺に付属する神社が存在した可能性がある。その場所は、現在の「鳥居」のあたりになろうが、寺院境内神社の可能性を考えておきたい。

鎌倉時代の光明山寺は、東大寺の末寺として重要な位置を占めるようになる。建長六(1254)年十月三十日付「関東御教書案」(『鎌倉遺文』7816号)によれば、光明山寺の南に接する近衛家の古河荘の雑掌が新たに狼藉に及んだことが書かれている。場所から考えれば、光明山寺の地が古河荘に侵略されはじめたことが推定される。この古川荘と光明山寺との相論は、鎌倉幕府ではなく、朝廷側で裁決がなされ、結局文永七(1270)年七月二十六日付の「後嵯峨上皇院宣案」(『鎌倉遺文』10656号)で、光明山寺の四至内は寺領とし、田畠は「建久検注帳」によって荘家が領掌することになった。このように、境界をめぐる相論が起こるなど、光明山寺も相論の矢面に立つようになってきた。

室町時代には、先に引用した『興福寺官務牒疏』の記載にみられるように、南都の興福寺の末寺となる。そのときの状況は、「光明山寺、在相樂郡相谷東棚倉山、僧坊二十八宇、末山二十八宇、交衆二十口」とあり、具体的な規模がわかる。さらに、応仁・文明の大乱の頃になると、『大乗院寺社雑事記』の文明二(1470)年八月・九月条によれば、「(八月)十

四日・・一、伊賀国守護仁木出陣山城国光明山、一国物忿以外次第也云々」とあり、東軍伊賀守護の仁木氏が光明山へ出陣しており、戦乱に巻き込まれることとなる。

このように、光明山寺も多くの寺社と同様、応仁の乱以後の戦国時代の混乱で没落したことは確実であろう。廃絶時期については、不明な点が多い。角田文衛氏の研究によれば、延宝年間前後頃(17世紀後半)に成立した『山州名跡志』などの近世の地誌類に、この頃には光明山寺が廃絶していることが書かれていることや、寛永9(1632)年十一月二十一日付の『笠置寺年預書状』に笠置寺の末寺として光明山寺がみえることを根拠に、寛永以降延宝以前に廃絶したことを推定された。今のところ、文献史料上では明確に廃絶時期を示せないが、貝原益軒の『和州巡覧記』(1696年)に光明山寺が廃寺になっていることが見えるので、角田氏の推定のとおり、17世紀末までには廃絶したとしておくのがよかろう。

以上のように、江戸時代のはじめ頃に歴史を閉じた光明山寺ではあるが、1992年になって農業基盤整備事業の一環である農免農道新設工事に先だち、山城町教育委員会が発掘調査を実施するにいたった。むろん、これまでにも角田文衛氏などのように試掘調査を行われたこともあったが、本格的な調査はこれがはじめてであった。

まず、寺域の推定範囲であるが、南北約2km・東西約5kmの広大な範囲を占めていたことが推定された。調査では、光明山寺の中心伽藍と推定される地域である。調査の結果、門跡・築地跡・道路跡・トイレ跡が見つかった。

このうち、門は桁行4.2m・梁間3.0mの一間門で、築地が取り付いている。屋根の構造は檜皮葺きで一部に瓦が葺かれた状況がわかった。しかも、出土瓦の様式から、この門は13世紀中頃に建立され、14世紀末には焼失してしまい、その後再建されなかったことが判明した。また、この門から約30m西の地点で、築地に接続する石組みの遺構がみつかった。この遺構は、長さ約2.4m・幅約0.2m・深さ約0.8mを測り、溝に流れるような構造を持っていた。そのため、この遺構は、水洗式の中世のトイレ跡と推定されるようになった。

このように、門やトイレ跡などの重要な遺構もみつかった光明山寺ではあるが、遺物からみる限り、平安時代にまでさかのぼるものは出土していない。この後の調査の進展と研究の深まりによって光明山寺の歴史の解明がより詳しく行われるであろう。

(土橋　誠)

<参考文献>
岩井武俊「蟹満寺及び廃光明山寺に就きて」(『考古界』5-9　考古学会)　1906
角田文衛「廃光明山寺の研究」(『考古学論叢』1　考古学研究会)　1936
田中重久「平安奠都以前の寺趾と其出土瓦に就いて」『夢殿論誌』18　1938
『京都府の地名』　平凡社　1981
『山城町史』本文編・史料編　山城町　1987・1990

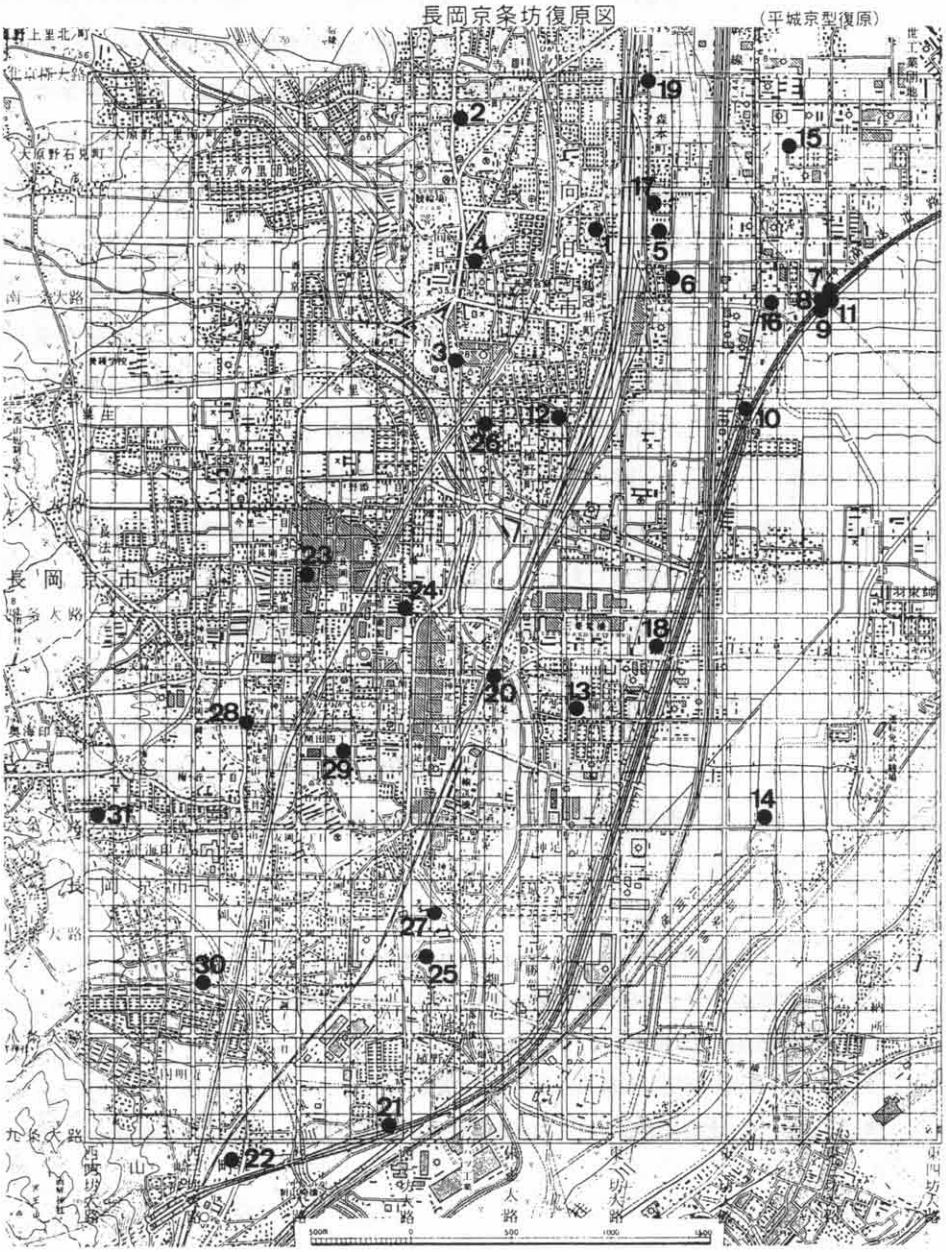
長岡京跡調査だより・50

長岡京連絡協議会は、平成６年５月25日・６月22日・７月27日に開催された。報告のあった発掘調査は、宮内４件、左京域15件、右京域12件で、その他京外の２件を合わせると33件である(一覧表・調査地位置図参照)。この内、主要な報告について調査内容を簡単に紹介する。(注1)

調査地一覧表

(1994年７月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第285次	7ANDYR-1	向日市森本町藪路27	(財)向日市埋文	4/11～5/17
2	宮内第286次	7ANBMC-1	向日市寺戸町南垣内61	(財)向日市埋文	4/18～5/17
3	宮内第287次	7ANFUT-1	向日市上植野町馬立3-6	(財)向日市埋文	7/4～
4	宮内第288次	7ANEAC	向日市鶏冠井町荒内地内	(財)向日市埋文	7/18～7/22
5	左京第327次	7ANDID-5	向日市森本町石田12-1・13-1	(財)向日市埋文	4/4～6/24
6	左京第328次	7ANEJK-5	向日市鶏冠井町上古	(財)向日市埋文	4/4～7/22
7	左京第329次	7ANVKN-3	京都市南区東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/11～
8	左京第330次	7ANVST-3	京都市南区東土川町正登	(財)京都府埋文	4/11～
9	左京第331次	7ANVST-4	京都市南区東土川町正登	(財)京都府埋文	4/11～
10	左京第332次	7ANEKZ-8	向日市鶏冠井清水	(財)京都府埋文	4/11～6/16
11	左京第333次	7ANVST-5	京都市南区久世東土川町正登	(財)京都府埋文	7/4～
12	左京第335次	7ANFJK-6	向日市上植野町浄徳15-2他	(財)向日市埋文	6/5～6/30
13	左京第338次	7ANMMR-4	長岡京市神足ミドロ14	(財)長岡京市埋文	4/18～5/19
14	左京第339次	7ANYNO-2	京都市伏見区淀樋爪町地内	(財)京都市埋文研	4/1～
15	左京第340次	7ANVMK-3	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文研	4/4～5/24
16	左京第341次	7ANENR-3	向日市鶏冠井町西金村5他	(財)向日市埋文	5/13～
17	左京第342次	7ANDID-6	向日市森本町石田26	(財)向日市埋文	5/10～6/8
18	左京第344次	7ANLZS-4	長岡京市馬場図所22-1他	(財)長岡京市埋文	5/18～7/5
19	左京第345次	7ANDKD-5	向日市森本町上町田1-1	(財)向日市埋文	5/16～
20	右京第465次	7ANLTR-4	長岡京市馬場民家浦40他	(財)長岡京市埋文	4/12～4/28
21	右京第466次	7ANTTD-5	大山崎町下植野寺門	(財)京都府埋文	6/10～
22	右京第468次	7ANSCE	大山崎町円明寺茶屋前32	大山崎町教委	4/25～6/17
23	右京第469次	7ANKYR-4	長岡京市長岡二丁目2	(財)長岡京市埋文	5/23～6/29
24	右京第470次	7ANKKC-1	長岡京市開田一丁目28	(財)長岡京市埋文	5/25～6/17
25	右京第471次	7ANQMK-2	長岡京市久貝二丁目810	(財)長岡京市埋文	5/30～6/17
26	右京第472次	7ANFNM-5	向日市上植野町野上山21	(財)向日市埋文	5/30～6/29
27	右京第473次	7ANQKS-2	長岡京市勝竜寺28	(財)長岡京市埋文	5/31～
28	右京第474次	7ANKNZ-7	長岡京市天神一丁目15-8	(財)京都府埋文	6/7～
29	右京第475次	7ANKNT-3	長岡京市開田四丁目608-1・8	長岡京市教委	6/27～
30	右京第476次	7ANSTE-14	大山崎町字円明寺小字鳥居前	大山崎町教委	6/6～7/6
31	右京第477次	7ANOHR-8	長岡京市海印寺方丸15・14-1	(財)長岡京市埋文	7/8～7/18
32	中海道遺跡第27次		向日市物集女町中海道51-10	(財)向日市埋文	6/20～7/18
33	山城国府跡第32次		大山崎町字大山崎小字銭原	大山崎町教委	5/9～5/31



▽番号は一覧表・本文（ ）内と対応

調査地位置図

左京第328次（6）

（財）向日市埋蔵文化財センター

左京第265・277・287次調査で確認され、大きな論議を生んだ内郭構造をもつ左京二条二坊十町の宅地（推定東院跡）の西外郭西半部分の調査。長岡京期の遺構として、掘立柱建物跡２棟、築地塀２、溝群、それに二条条間北小路南側溝が検出された。掘立柱建物跡は、南北軸を同じくする同規模の２棟である。特筆すべき出土遺物としては、木簡、墨書土器、長岡京7722Ｅ型式軒平瓦の完形品などがある。西外郭地区には３時期の変遷がみられ、建物跡群は第３期になってはじめて現われる。つまり、内郭と東外郭の建物跡群の完成後に設置された施設であったようである。担当者は、内郭や東外郭とは性格が異なり、「出土した木簡や墨書土器などから、離宮を維持管理し、また天皇を補佐する職務を有した官衙的な施設であった[注2]」と考えている。

左京第329・330・331・332次（7～10）

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

名神高速道路拡幅工事関係の一連の調査である。いずれも線的な調査であるが、条坊の側溝や建物跡の一部、柵列など、今後の面的な調査に期待をもたせる重要な遺構が検出された。第329次では、東三坊大路東側溝、掘立柱建物跡、柵列、第330次では、二条条間大路南北側溝、東三坊大路西側溝、築地跡、第331次では、二条条間南小路南北側溝、第332次では三条条間小路南側溝、掘立柱建物跡などがそれぞれ確認されている。

（小山雅人）

注１　この「長岡京跡調査だより」では、本文中の条坊名は特にことわらない限り、新説（山中　章「古代条坊制論」（『考古学研究』第38巻第４号）　1992）に拠っている。ただし調査地位置図の長岡京条坊復原図は旧来のものである。

注２　『長岡京跡（推定）東院跡（長岡京左京第328次調査）～左京二条二坊十町（南一条二坊十二町）、鶏冠井遺跡～』（現地説明会資料；向日市埋蔵文化財センター）　1994.7.9，参照。

センターの動向（6.5.1～7.31）

1．できごと

5．9　龍尾寺跡(舞鶴市)発掘調査開始

内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開始

10　森　郁夫京都国立博物館考古室長、市坂瓦窯跡(木津町)現地指導

11～12　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：長野市)城戸局長、安田課長補佐、杉江主事出席)

12　大俣城跡(舞鶴市)発掘調査開始

龍尾寺跡発掘調査終了(5.9～)

13　奈具古墳群(弥栄町)発掘調査開始

上津屋遺跡(八幡市)発掘調査開始

17　裾谷横穴群(大宮町)発掘調査開始

20　戸田敏彦木津町長、市坂瓦窯跡現地視察

金谷古墳群(峰山町)発掘調査開始

21　市坂瓦窯跡、上人ヶ平埴輪窯跡、瓦谷埴輪窯跡(木津町)現地説明会

23　奈具岡遺跡(弥栄町)発掘調査開始

24　上津屋遺跡発掘調査終了(5.13～)

25　長岡京連絡協議会

27　西飼神社遺跡(舞鶴市)発掘調査終了(4.18～)

31　退職職員辞令交付

6．1　採用職員辞令交付

3　国際協力事業団(JICA)研修生、黒部製鉄遺跡現地見学

市坂3号墳(木津町)発掘調査開始

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：奈良市西大寺)城戸局長、佐伯次長、安藤課長出席

7　松村恵司文化庁調査官、市坂瓦窯跡現地指導

長岡京跡右京第474次調査(長岡京市・乙訓土木)発掘調査開始

11　大山崎町歴史資料館歴史講座(於：大山崎町)講演(高橋課長)

第1回加悦町古代体験玉つくり教室(於：加悦町農村文化センター)講師(田代調査員)

15　監事監査

16　洞中古墳発掘調査終了(4.20～)

長岡京跡左京第332次調査(向日市・名神向日工区)発掘調査終了(4.11～)

16～17　全国埋蔵文化財法人連絡協議会(於：茨木市)城戸局長、佐伯次長、松尾主事出席

18　綾部市資料館教養講座(於:綾部市)講師(小池調査員)

19　大宮町文化財保存会総会記念講演(於:大宮町周枳公民館)講師(増田主任調査員)

21　定山遺跡(岩滝町)発掘調査開始
　樋口隆康副理事長、市坂瓦窯跡現地視察

22　都出比呂志理事、市坂瓦窯跡現地視察
　長岡京連絡協議会

23　第40回理事会･役員会(於：ルビノ京都堀川)福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、城戸秀夫常務理事、中澤圭二、川上　貢、上田正昭、足利健亮、佐原　真、藤田价浩、高橋正典、堤圭三郎の各理事、吉田三枝子監事出席

25　第71回文化財セミナー開催(別掲)

28　燈籠寺遺跡(木津町)関係者説明会
　塔遺跡(京北町)発掘調査開始

7. 4　長岡京跡右京第466次調査(大山崎町･名神下植野工区)発掘調査開始

5～6　城戸局長、北部現場現地視察

7　埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於:東大阪市)安藤課長、水谷係長出席

12　燈籠寺遺跡(木津町)発掘調査終了(4.18～)

14　山尾古墳(綾部市)現地説明会
　市坂3号墳発掘調査終了(6.3～)

18　若林遺跡(宇治市)発掘調査開始

20　北稲遺跡(精華町)発掘調査開始

25　竹野遺跡(丹後町)発掘調査開始
　左坂古墳群(大宮町)発掘調査開始

27　長岡京連絡協議会

2．普及啓発事業

6.25　第71回埋蔵文化財セミナー開催(於：園部町立中央公民館)－平成5年度埋蔵文化財発掘調査成果・丹波と青龍三年銘鏡－森下　衛「園部町黒田古墳の調査について」、安田章・横島勝則「弥栄町・峰山町大田南5号墳の調査について」、小泉信吾「方格規矩文と四神文について」

3．人事異動

5.31　京極隆夫理事退任
　中谷雅治次長兼調査第1課長退職(府立丹後郷土資料館館長に)
　鍋田　勇調査員退職(府文化財保護課技師に)

6. 1　高橋正典理事就任
　調査第1課長高橋美久二、府教育庁派遣により採用

(安藤信策)

受贈図書一覧（6.5.1～7.31）

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第85集 滝里遺跡群Ⅳ 滝里10遺跡・滝里11遺跡・滝里31遺跡、同第86集 ユカンボシC２遺跡、同第87集 鳴川右岸遺跡、同第88集 高岡１遺跡、同第89集 美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ、同第90集 オサツトー１遺跡・キウス７遺跡、キウス４遺跡、調査年報６ 平成５年度、遺跡が語る北海道の歴史 (財)北海道埋蔵文化財センター15周年記念誌
秋田県埋蔵文化財センター	秋田県文化財調査報告書第240集 館の上館遺跡、同第241集 上谷池遺跡、同第242集 虫内Ⅲ遺跡、同第243集 小田Ⅳ遺跡、同第244集 白坂遺跡発掘調査報告書、同第245集 冷水山根遺跡・寒沢Ⅱ遺跡、同第246集 中山遺跡、同第247集 桂の沢遺跡発掘調査報告書、同第248集 天戸森遺跡、同第249集 大松沢Ⅰ遺跡、同第250集 払田柵跡調査事務所年報1993 払田柵跡、同第251集 遺跡詳細分布調査報告書、秋田県埋蔵文化財センター年報12(平成５年度)、秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第９号
(財)山形県埋蔵文化財センター	年報 平成５年度
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書第287集 母畑地区遺跡発掘調査報告33、同第288集 母畑地区遺跡発掘調査報告34、同第289集 三春ダム関連遺跡調査報告７、同第291集 馬場平Ｂ遺跡 栗出館跡、同第296集 六郎次遺跡 塩喰岩陰遺跡、同第298集 母畑地区遺跡分布調査報告18、同第299集 板木沢遺跡 荻原遺跡、同第301集 安積Ｐ．Ａ拡幅改良事業東北自動車道遺跡予備調査報告、同第302集 常磐自動車道遺跡分布調査報告３
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市教育文化事業団 年報４、いわき市教育文化事業団研究紀要第５号、いわき市埋蔵文化財調査報告第16冊 上ノ台遺跡、同第34冊、同第35冊 小山遺跡、同第36冊 上ノ原Ｃ遺跡、同第37冊 滝尻城跡Ａ、国塚遺跡発掘調査概報
(財)茨城県教育財団	茨城県教育財団文化財調査報告第84集 寄居遺跡 うぐいす平遺跡、同第85集 原田北遺跡 西原遺跡、同第86集 中久喜遺跡、同第87集 西ノ脇遺跡 前田村遺跡、同第88集 高崎貝塚、同第89集 姥ヶ谷津遺跡 南開遺跡、同第90集 日枝西遺跡 上岩崎南遺跡、年報13 ＜平成５年度＞、研究ノート３号 平成５年度
(財)勝田市文化･スポーツ振興公社文化財調査事務所	(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第９集 武田Ⅶ、同第10集 久慈川 那珂川流域の貝塚
(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター	研究紀要 第１号
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第132集 上野国分僧寺・尼寺中間地域(８)、同第161集 天引狐崎遺跡Ⅰ、同第161集 白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ、同第164集 二之宮宮東遺跡、同第165集 今井道上遺跡、同第170集 笂井八日市遺跡、白井遺跡群(白井二位屋遺跡)、研究紀要11
埼玉県立埋蔵文化財センター	埼玉県立埋蔵文化財センター 年報３
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	研究紀要 第10号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第132集 水判土堀の内・林光寺・根切、同第133集 大沼遺跡、同第134集 花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台、同第135集 樋ノ下遺跡、同第136集 足

	洗遺跡、同第137集　光山遺跡群、同第138集　大野田西遺跡、同第139集　稲荷台遺跡、同第140集　新屋敷遺跡、同第141集　榎戸遺跡、同第142集　清橋遺跡、同第143集　桜沢窯跡、同第144集　原山坊ノ在家遺跡
(財)山武郡市文化財センター	山武郡市文化財センター発掘調査報告書第14集　芝山町小池木戸脇遺跡、上布田向遺跡Ⅰ
(財)香取郡市文化財センター	事業報告Ⅱ、(財)香取郡市文化財センター調査報告書第11集　大鯉遺跡、同第13集　館山遺跡、同第15集　西塚南古墳群、同第16集　五十塚古墳群、同第17集　台阿らく遺跡、同第19集　城山４号墳、同第20集　窪野谷大屋戸遺跡、同第21集　青馬新西塚遺跡、同第22集　織幡カジ山遺跡群
(財)君津郡市文化財センター	(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第71集　美生遺跡群Ⅰ、同第79集　飯野陣屋二の丸跡、同第86集　林遺跡Ⅱ、同第89集　郡条里遺跡Ⅲ、同第88集　戸崎城山遺跡Ｃ地点、同第94集　下向山遺跡、同第96集　上北原古墳、同第97集　横峰遺跡、同第98集　外箕輪遺跡発掘調査報告書、君津郡市文化財センター研究紀要Ⅵ、君津郡市文化財センター年報 No.11
(財)東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター研究論集　ＸⅡ、東京都埋蔵文化財センター年報13、東京都埋蔵文化財センター調査報告第15集　多摩ニュータウン遺跡 平成３年度、同第16集　多摩ニュータウン遺跡
神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21　宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書16　鳥林遺跡・小坂西遺跡・鶴萩七尋岩陰遺跡 他、同17　鶴前遺跡、同18　千見遺跡、同19　栗林遺跡・七瀬遺跡
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団	新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成５年度、新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集　沖ノ羽遺跡Ⅰ(Ａ地区)、同第59集　細池遺跡・寺道上遺跡、同第60集　上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ　一之口遺跡東地区、同第62集　上郷遺跡Ⅰ、同第63集　関川関所跡
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第５集　梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告　第８集　下半田川Ｃ窯跡Ⅰ、平成５年度　瀬戸市埋蔵文化財センター年報、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター　研究紀要　第２輯
三重県埋蔵文化財センター	平成５年度　三重県埋蔵文化財年報５、一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ、第13回三重県埋蔵文化財展　伊勢志摩をめぐる考古学、大垣内遺跡、北野遺跡、天白遺跡
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第30回)資料、大阪文化財センター研究助成報告書　研究紀要　Vol.１、大阪文化財研究　－20周年増刊号－、同－第３～６号－、図録　大坂城跡の調査１～３、大坂城跡の発掘調査３、(財)大阪文化財センター設立20周年記念公開シンポジウム　みる　きくふれる　原始・古代のコメ作り、一般府道本堂高井田線改良工事に伴う青谷地区埋蔵文化財分布調査報告書、都市計画道路大阪モノレール建設に伴う和道遺跡発掘調査概要報告書、河合遺跡、巨摩・若江北(その３)発掘調査概要、新家(その５)、瓜生堂遺跡発掘調査報告、池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ～Ⅷ、図録　農耕の技術とまつり　池島・福万寺遺跡の調査から、小阪遺跡本報告書
(財)大阪市文化財協会	長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ、大坂城下町跡Ⅰ、上町台地の遺跡
高槻市立埋蔵文化財調査	高槻市文化財調査概要ＸＸ　嶋上遺跡群18、高槻市文化財年報　平成４年

センター	度
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇、文化財情報システム実施設計書(2) プロトタイプ構築設計書
奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度、奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1993、平城京東市跡推定地の調査XⅡ 第14次発掘調査概要
鳥取県埋蔵文化財センター	鳥取県教育文化財団調査報告書34 尾高御建山遺跡 尾高古墳群、同35 泉中峰・泉前田遺跡、同36 南谷大山遺跡Ⅱ 南谷29号墳
島根県埋蔵文化財調査センター	中山遺跡 巻林遺跡、石田遺跡、臼コクリ遺跡・大原遺跡、明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡 島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡、石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡、上久々茂土居跡・大峠遺跡、益田市上久々茂土居跡遺跡出土鉄滓・鉄釘の金属学的調査、島根県教育庁文化課 埋蔵文化財調査センター年報Ⅱ
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財報告24、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 百間川原尾島遺跡3、同89 山陽自動車道建設に伴う発掘調査8、同90 山陽自動車道建設に伴う発掘調査9、同91 中国横断自動車道建設に伴う発掘調査1、同92 中井・南三反田遺跡
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集 東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ、同第106集 東広島ニュータウン遺跡群Ⅲ、同第107集 東広島ニュータウン遺跡群Ⅴ、同第114集 西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	(財)香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅱ、正箱遺跡・薬王寺遺跡、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十冊 金蔵寺下所遺跡 西碑殿遺跡、同第十四冊 川津中塚遺跡、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成5年度、空港跡地遺跡発掘調査概報、県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小山・南谷遺跡 平成5年度、多肥松林遺跡発掘調査概報 平成5年度
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財発掘調査報告書第44集 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ、同第45集 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ、同第46集 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ、同第47集 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ、同第48集 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ、同第49集 北斎院地内遺跡、同第50集 福角古墳・福角遺跡、同第51集 大峰ヶ台地区 南江戸桑田遺跡1次・2次 辻遺跡3次・4次 大峰ヶ台Ⅱ遺跡、同第52集 多々羅製塩遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市文化財調査報告書 第38集 古照遺跡
小樽市教育委員会	豊井浜遺跡 小樽市埋蔵文化財調査報告書第9輯、塩谷6遺跡 平成5年度小樽市埋蔵文化財調査概報
平取町教育委員会	平取町ピパウシ2遺跡
深川町教育委員会	北広里3遺跡発掘調査報告書
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第173集 下ノ内浦遺跡、同第178集 郡山遺跡XⅣ、同第179集 仙台平野の遺跡群XⅢ、同第183集 仙台東郊条里跡、同第184集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(7)、同第187集 愛宕山横穴墓群
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第139集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報[平成4年度]
足利市教育委員会	足利市埋蔵文化財調査報告 第26集 平成4年度埋蔵文化財発掘調査年報

前橋市教育委員会	平成４年度文化財調査報告書第23集
入間市教育委員会	入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第14集　金堀沢Ⅱ遺跡、同第15集　宮ノ小路遺跡、同第16集　久保遺跡
袖ヶ浦市教育委員会	袖ヶ浦市史研究　第２号、平成５年度　袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書、袖ヶ浦市史基礎資料調査報告書２　袖ヶ浦の民具、同３　袖ヶ浦の諸職
船橋市教育委員会	平成５年度　船橋市内遺跡発掘調査報告書
山武町教育委員会	島戸境１号墳
府中市教育委員会	武蔵国府　府中市遺跡調査会年報昭和56(1981)年度、同昭和57(1982)年度、府中市埋蔵文化財研究紀要　第１号、府中市埋蔵文化財調査報告第９集　武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅸ　天神町遺跡調査報告Ⅰ、同11集　武蔵国府関連遺跡調査報告11、同第12集　武蔵国府関連遺跡調査報告12　天神町遺跡調査報告Ⅱ、同第13集　武蔵国府関連遺跡調査報告13
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告36
鎌倉市教育委員会	鎌倉市二階堂史跡永福寺跡、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10　平成５年度　発掘調査報告
小田原市教育委員会	小田原市文化財調査報告書第44集　史跡　石垣山Ⅲ、同第45集　史跡　小田原城跡　二の丸中堀Ⅰ、同第46集　荻窪川根遺跡発掘調査報告書、同第47集　小田原城下　欄干橋町遺跡Ⅱ、同第48集　二の丸中堀Ⅱ、同第49集　小田原城下　法雲寺跡、同第50集　天神山台遺跡、同第51集　小田原城　八幡山古郭　本曲輪　三の丸　元蔵跡、同第52集　殿窪遺跡、同第53集　小田原城　新道遺跡、同第54集　小田原城下　欄干橋町遺跡Ⅲ、国指定史跡小田原城跡住吉橋復原工事報告書
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書第９輯　立石南遺跡Ⅱ
松本市教育委員会	松本市文化財調査報告No.112　松本市宮の上遺跡Ⅱ・原畑遺跡、同No.113　松本市平田本郷遺跡、同No.114　松本市トウコン原遺跡Ⅱ
岡谷市教育委員会	志平・長塚・地獄沢遺跡発掘調査報告書
新井市教育委員会	平成５年度　新井市遺跡確認調査報告書　高床山遺跡群　赤坂城跡　高柳遺跡群
富山市教育委員会	富山市三熊中山窯跡発掘調査概要
大門町教育委員会	大門町埋蔵文化財調査報告第６集　布目沢北遺跡発掘調査概要、同第９集　富山県大門町　串田新遺跡Ⅶ
小浜市教育委員会	小湊遺跡発掘調査報告書
武生市教育委員会	武生市埋蔵文化財調査報告16　王子保窯跡群Ⅵ
多治見市教育委員会	平野西窯　平野西窯跡発掘調査報告書、白土原14号窯発掘調査報告書
大垣市教育委員会	大垣市埋蔵文化財調査概要　平成四年度
古川町教育委員会	古川町埋蔵文化財調査報告第３集　中野山越遺跡発掘調査報告書、同第４集　上町遺跡トヨタ地点・Ｏ地点・栗原センター地点発掘調査報告書
袋井市教育委員会	昭和55年度緊急発掘調査報告書　袋井市長者平遺跡、鶴松遺跡、愛野向山Ａ－２・３・４号墳、長者平遺跡、鶴松遺跡Ⅱ、愛野向山Ａ－８号墳　愛野向山墳墓群　愛野向山Ⅳ遺跡、大門遺跡、上石野１号墓、坂尻遺跡、衛門坂古窯跡、昭和63年度国庫補助事業緊急発掘調査報告書　袋井市原川城跡・坂尻遺跡、大門遺跡Ⅴ、原川城的場・坂尻遺跡、坂尻遺跡、坂尻道下遺跡、久野城跡
稲沢市教育委員会	稲沢市文化財調査報告ＸＬＩ　東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅵ)、同ＸＬⅡ　旧国鉄操車場跡地内試掘調査報告書(Ⅲ)、亀翁寺境内発掘調査報告書
鈴鹿市教育委員会	第３回鈴鹿市埋蔵文化財展　中ノ川流域の考古学、鈴鹿市埋蔵文化財調

	査報告13 北ノ添遺跡発掘調査報告書、伊勢国分寺・国府跡
安濃町教育委員会	安濃町埋蔵文化財発掘調査報告書7 平塚古墳群発掘調査報告書、同9 天野山遺跡発掘調査報告書
滋賀県教育委員会	平成4年度 滋賀県埋蔵文化財調査年報、錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅳ、同Ⅷ、大津南部遺跡群、下之郷遺跡・法養寺遺跡・五斗井遺跡、妙楽寺遺跡・尼子遺跡、六条遺跡発掘調査報告書、下之郷遺跡、高木遺跡・後川遺跡、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＸ-1a、同ＸＸ-1b
八日市市教育委員会	八日市市文化財調査報告(13) 大森陣屋遺跡・広間寺遺跡発掘調査報告書、同(14) 北町古墳群発掘調査報告書
今津町教育委員会	椋川日吉・山神社の懸仏群調査報告書
吹田市教育委員会	(平成5年度)埋蔵文化財緊急発掘調査概報 高城遺跡・豊島郡条里遺跡・垂水遺跡・垂水南遺跡、佐井寺南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
高石市教育委員会	大園遺跡他の発掘調査概要
泉南市教育委員会	第6回歴史の華ひらく泉南シンポジウム 日本古代国家の成立を探る、泉南市遺跡群発掘調査報告書ＸＩ
河内長野市教育委員会	河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ｘ 三日市遺跡 観心寺遺跡、大本山天野山金剛寺 持国天・増長天像保存修理報告書
阪南市教育委員会	阪南市埋蔵文化財報告ＸＶ 貝掛遺跡、同ＸⅧ 阪南市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅸ
岸和田市教育委員会	岸和田市文化財調査概要19 平成5年度 発掘調査概要
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群ＸＶ 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書30、古市駅前開発事業に伴う試掘調査報告書 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書30、第8回はびきの歴史シンポジウム 古代の開発
八尾市教育委員会	八尾市文化財調査報告29 八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ、同30 八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅱ
枚方市教育委員会	枚方市文化財調査報告第28集 枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1993
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告第34集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要
柏原市教育委員会	柏原市埋蔵文化財発掘調査概要 1993年度、柏原市所在遺跡発掘調査概報 1993年度、船橋遺跡、柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1993年度、柏原市文化財概報 1993-Ⅷ 玉手山遺跡
熊取町教育委員会	熊取町埋蔵文化財調査報告第21集 中家住宅発掘調査概要Ⅰ、同第22集 熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅷ
神戸市教育委員会	垂水・日向遺跡 第1，3，4次調査、大開遺跡発掘調査報告書、企画展示 古代人と動物
伊丹市教育委員会	伊丹市埋蔵文化財調査報告書第19集 伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅲ、国史跡 有岡城跡保存整備事業報告書、三軒寺前プラザ建設に伴う発掘調査報告書 有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ
加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財調査報告11 野間遺跡、同22 山枝 なめら 別府中町遺跡、同27 小谷遺跡発掘調査報告書、小谷遺跡、
三田市教育委員会	三田歴史講演会 さんだと金心寺
龍野市教育委員会	龍野市文化財調査報告9 播磨国鵤荘現況調査報告、同11 布勢駅家Ⅱ 、同12 長尾塔後遺跡
北淡町教育委員会	舟木遺跡
新宮町教育委員会	新宮町文化財調査報告 新宮町古文書目録別巻 歴墨遺纂 高坂好遺稿集、新宮町文化財調査報告21 栗栖里

大和高田市教育委員会	コンビラ山古墳 第３次発掘調査報告書
橿原市教育委員会	橿原市埋蔵文化財調査概要11 橿原市埋蔵文化財発掘調査概報 平成５年度
大社町教育委員会	修理免本郷遺跡
岡山市教育委員会	足守庄(足守幼稚園)関連遺跡発掘調査報告、西祖山方前遺跡・西祖橋本(御休幼稚園)遺跡発掘調査報告
東広島市教育委員会	東広島市教育委員会文化財調査報告書第26集　西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、同第28集　原１号遺跡発掘調査報告書、史跡三ッ城古墳整備事業報告書
下関市教育委員会	大判遺跡 埴生口遺跡
徳島市教育委員会	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要４
福岡県教育委員会	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第２集　辻垣畠田・長通遺跡、同第３集　団後遺跡・西一町田遺跡・炭山遺跡、北ノ屋敷遺跡 城島町文化財調査報告書第１集、白木西原遺跡Ⅰ　立花町文化財調査報告書第７集、十籠星野小学校遺跡　星野村文化財調査報告書第２集、公門原遺跡・真崎遺跡 川崎町文化財調査報告書第３集、植松古墳群Ⅱ 広川町文化財調査報告書第11集、酒見貝塚　大川市文化財調査報告書第２集、内平原遺跡 同第３集、大宰府史跡 平成５年度発掘調査概報、浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第７集　日永遺跡Ⅱ、同第８集　堺町・大碇遺跡、干拓遺跡(旧柳河藩領)、別所次郎丸遺跡　福岡県文化財調査報告書第114集、前田遺跡　同第115集、宗原遺跡　同第116集、草野古川遺跡　同第117集、史跡　筑前国分寺跡　同第118集、原遺跡　同第119集、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－28～32－
福岡市教育委員会	席田青木遺跡１　福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集、席田遺跡群７同第357集、麦野Ｂ遺跡Ⅱ、笹原遺跡Ⅰ、奈多砂丘Ｂ遺跡１　同第360集、中南部(３)　同第361集、板付周辺遺跡調査報告書(16)　同第362集、五十川赤目遺跡　同第363集、那珂遺跡９　同第364集、那珂10　同第365集、那珂11　同第366集、那珂遺跡12　同第367集、比恵遺跡群(14)　同第369集、博多41　同第370集、博多42、中村町遺跡１　同第373集、吉塚本町遺跡同第374集、西新町遺跡　同第375集、藤崎遺跡９　同第376集、有田・小田部第19集　同第377集、有田・小田部第20集　同第378集、飯倉Ｆ遺跡１同第379集、山崎古墳群　同第380集、東入部遺跡群１　同第381集、東入部遺跡群２　同第382集、東入部遺跡群３　同第383集、田村遺跡Ⅸ　同第384集、田村遺跡Ⅹ　同第385集、脇山Ⅵ　同第386集、飯倉唐木遺跡　飯倉Ｃ遺跡第２次調査　同第387集、鋤崎遺跡１　同第388集、今宿遺跡　同第389集、飯氏遺跡群２　同第390集、福岡市埋蔵文化財年報Ｖol．７　平成４(1992)年度
直方市教育委員会	広江窯跡 直方市文化財調査報告書第16集
太宰府市教育委員会	高雄地区遺跡群　太宰府市の文化財第22集、大宰府条坊跡　同第23集、水城跡　同第24集、目で見る太宰府市の文化財１　水城跡
春日市教育委員会	春日市埋蔵文化財年報１　平成４年度、須玖五反田遺跡　春日市文化財調査報告書第22集
八女市教育委員会	寺ノ西遺跡　八女市文化財調査報告書第30集、室岡工業団地内遺跡Ⅱ　同第31集、鍛冶屋遺跡　同第32集、高野町遺跡　同第33集、八女市南部地区県営圃場整備事業地内　埋蔵文化財調査概報５　同第34集、八女市農村活性化住環境整備事業地内(八女西部地区)埋蔵文化財調査概報Ⅰ　同第35集
千代田町教育委員会	千代田町文化財調査報告書第16集　貴別当神社遺跡Ⅳ

熊本市教育委員会	大江遺跡群Ⅱ　大江遺跡群第３次調査区発掘調査報告書、神水遺跡Ⅱ、つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅰ、池辺寺跡 発掘調査概報Ⅰ
三加和町教育委員会	三加和町文化財調査報告 第８集 田中城跡Ⅷ
大分県教育委員会	府内城三ノ丸遺跡、府内城三ノ丸遺跡Ⅱ、上野第１遺跡・上野第２遺跡・手崎遺跡、大分県埋蔵文化財年報２　平成４(1992)年度版
佐伯市教育委員会	栂牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書 佐伯地区遺跡発掘調査報告書
大野町教育委員会	大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ
宮崎市教育委員会	垂水第１遺跡 市道久保垂水線改良工事に伴う発掘調査報告書
えびの市教育委員会	えびの市埋蔵文化財調査報告書第13集　原田・上江遺跡群法光寺遺跡Ⅱ、同第14集 田代地区遺跡群上田代遺跡
高崎町教育委員会	高崎町文化財調査報告書第５集 町内遺跡試掘調査
川辺町教育委員会	川辺町民俗資料調査報告書(１) 川辺町の民具、同(２) 川辺町の民俗
岩手県立博物館	岩手県立博物館研究報告 第11集
北上市立博物館	国見山自然観察ガイド
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第21号
秋田県立博物館	秋田県立博物館 館報 平成５年度、秋田県立博物館研究報告 第19号
土浦市立博物館	国指定史跡上高津貝塚Ａ地点、土浦市立博物館紀要 第５号
栃木県立なす風土記の丘資料館	栃木県立なす風土記の丘資料館年報　第１号(平成４年度版)、栃木県立なす風土記の丘資料館常設展示解説 那須の歴史と文化
埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第16号
千葉県立中央博物館	千葉県立中央博物館研究報告 第３巻第２号(通巻７号)
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第56集、同第57集
市立市川考古博物館	下総国分寺跡 平成元～５年度発掘調査報告書
大田区立郷土博物館	大田区立郷土博物館紀要 第４号 1993年度、特別展 工場まちの探検ガイド
調布市郷土博物館	調布市上ヶ給遺跡　第４地点、同第１地点、東京都調布市埋蔵文化財年報(1992)
五日市町立五日市町郷土館	水草木遺跡 都市計画道路 秋３・５・２号線水草木遺跡発掘調査報告書
出光美術館	出光美術館 館報第87号
茅ヶ崎市文化資料館	文化資料館調査研究報告２
川崎市市民ミュージアム	川崎市市民ミュージアム考古学叢書１ 線刻画 王禅寺白山横穴墓群の調査
石川県立歴史博物館	はにわ、石川県立歴史博物館年報　第４号　平成４・５年度版、石川県立歴史博物館紀要 第７号
福井県立博物館	北陸の玉
福井県立若狭歴史民俗資料館	若狭中核工業団地関係遺跡発掘調査報告書
敦賀市立博物館	敦賀市立博物館 紀要 第９号
岐阜県博物館	岐阜県博物館報 第17号
静岡市立登呂博物館	特別展　発掘された駿府城跡、参加体験ミュージアムセルフガイド　登呂村のくらしと木づくり、参加体験ミュージアムへの誘い、静岡市立登呂博物館館報(第４号)、平成３・４年度弥生人体験クラブ活動記録 登呂の弥生人２
浜松市博物館	浜松市博物館館報Ⅵ、博物館資料集３ 浜松の漁の道具
沼津市歴史民俗資料館	沼津市博物館紀要18、特別展 掘り出された原始・古代
名古屋市博物館	名古屋市博物館 研究紀要 第17巻

半田市立博物館	特別展 米づくり 近代から現代へ
斎宮歴史博物館	お伊勢まいり
滋賀県立安土城考古博物館	第5回 企画展 鉄砲のカラクリ、紀要 第2号、平成5年度 年報
大津市歴史博物館	大津市歴史博物館 研究紀要1、真盛上人遠忌500回記念 西教寺と天台真盛宗の秘宝
水口町立歴史民俗資料館	甲賀水口の歩みと暮らし
秦荘町歴史文化資料館	秦荘町・町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ
彦根城博物館	彦根城博物館研究紀要 第5号、彦根城博物館年報 平成4年度
大阪府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館図録8 富士山を望む弥生の国々
大阪府立近つ飛鳥博物館	平成6年度春季企画展 「輝きの復元」古墳・飛鳥の技術を求めて、近つ飛鳥写真集、須賀古墳群資料目録Ⅰ 土器編(実測図)
大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No.33、大阪市立博物館研究紀要 第26冊
柏原市立歴史資料館	柏原市立歴史資料館 館報5、企画展 縄文時代のはじまるころ
大阪城天守閣	大阪城天守閣紀要 第22号
西宮市立郷土資料館	文化財資料第39号 石在町出土銭と公智神社出土銭、西宮市立郷土資料館報 平成5年度(1993年度)
洲本市立淡路文化史料館	淡路島の古墳時代
橿原市千塚資料館	かしはらの歴史をさぐる2 平成5年度埋蔵文化財発掘調査速報展
鳥取県立博物館	郷土と博物館 第39巻第1、2号
広島県立歴史博物館	福山藩の教育と文化、日本琴始め
広島県立歴史民俗資料館	考古企画展 ひろしまの縄文土器
山口県立山口博物館	山口県立山口博物館研究報告 第20号、館報17 平成5年度
北九州市立考古博物館	第12回特別展『九州の貝塚』、北九州市立考古博物館年報－平成5年度－、研究紀要 VOL. 1
佐賀県立九州陶磁文化館	九州陶磁文化館年報 平成4年度 No.12
佐賀県立名護屋城博物館	展示案内
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	宇佐歴史民俗資料館年報 平成3年度、同平成4年度
ミュージアム知覧	村永定観遺作展 図録
茨城大学人文学部	博古研究 第7号
筑波大学歴史・人類学系	筑波大学先史学・考古学研究 第5集
早稲田大学考古学会	古代 第97号
早稲田大学第一文学部	早稲田大学戸山キャンパス埋蔵文化財試掘調査概報
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室	早稲田大学上石神井校地埋蔵文化財調査報告書 城山遺跡の調査
早稲田大学図書館	古代第97号
明治大学考古学博物館	明治大学考古学博物館 館報 No. 9
國學院大學考古學資料館	國學院大學考古学資料館紀要 第10輯
東洋大学	東洋大学文学部紀要 第47集 史学科篇 第19号、白山史学 第30号
東京大学文学部	東京大学文学部 考古学研究室研究紀要 第12号
国士舘大学文学部考古学研究室	考古学研究室報告 乙種第10冊 下野薬師寺跡
東海大学校地内遺跡調査団	東海大学校地内遺跡調査団報告4
金沢大学文学部考古学研究室	金沢大学考古学紀要 第21号

愛知大学文学部史学科	愛大史学 第2号、同第3号
名古屋大学文学部考古学研究室	名古屋大学文学部研究論集119 史学40、考古資料ソフテックス写真集第9集
皇學館大學史料編纂所	鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵資料目録 続編
大手前女子大学史学研究所・文化財調査室	三軒寺前プラザ建設に伴う発掘調査報告書 有岡城跡・伊丹郷町Ⅲ
天理大学文学部歴史文化学科考古学専攻研究室	奈良盆地の古環境と農耕、高原と湖の遺跡
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 津島岡大遺跡
岡山理科大学図書館	岡山理科大学 蒜山研究所研究報告 第19号
愛媛大学法文学部	江口貝塚Ⅱ 愛媛大学法文学部考古学研究報告 第3冊
北網圏北見文化センター	南町遺跡Ⅴ
大宮市遺跡調査会	大宮市文化財調査報告第35集 市内遺跡発掘調査報告 根切遺跡 C－108号遺跡、同第43集 B－66W号遺跡・C－66号遺跡、同第44集 深作稲荷台遺跡・A－137号遺跡、同第45集 原遺跡、同第46集 B－37号遺跡、同第47集 土屋下遺跡
山武考古学研究室分室アジア歴史ライブラリー準備室	アジア歴史ライブラリー設立実施要領
東邦考古学研究会	東邦考古 第18号
国立国会図書館	日本全国書誌 1994-16 No.1962
汐留地区遺跡調査会	汐留遺跡
(株)名著出版	歴史手帖 第22巻6～8号
日本考古学協会	日本考古学年報45(1992年度版)
(財)角川文化振興財団	平安京提要
都立学校遺跡調査会	岡本前耕地 都立砧工業高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書1、岡本前耕地 同2、都立第一商業高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書
落川・一の宮遺跡(日野3・2・7号線)調査会	落川・一の宮遺跡調査略報Ⅱ
葛飾区遺跡調査会	葛飾区遺跡調査会調査報告第11集 柴又帝釈天遺跡Ⅱ、同第17集 古録天東遺跡・古録天東遺跡Ⅱ、同第20集 鬼塚遺跡Ⅲ・本郷遺跡Ⅲ、同第29集 立石遺跡Ⅳ
国分寺市遺跡調査会	恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅵ、恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅰ、武蔵国分寺跡発掘調査概報XⅨ、同XX
都営川越道住宅遺跡調査会	武蔵台東遺跡発掘調査概報4
日の出町三吉野欠上遺跡調査団	三吉野欠上
玉川文化財研究所	大蔵東原遺跡発掘調査報告書、太井己遺跡発掘調査報告書、中荻野弁天山遺跡発掘調査報告書、七沢神出遺跡発掘調査報告書、善行遺跡発掘調査報告書、下溝鳩川遺跡発掘調査報告書
鎌倉考古学研究所	史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書・Ⅸ、由比ヶ浜4－6－9地点発掘調査報告書
(財)山梨文化財研究所	第5回「考古学と中世史研究」シンポジウム「中世」から「近世」へ 資料集
(社)石川県埋蔵文化財保	粟田遺跡発掘調査報告書

存協会	
伊場遺跡資料館内埋文整理事務所	梶子遺跡Ⅸ
丹南町	丹南町史 上巻、同下巻
(財)古代學協會	古代文化 第46巻第5～7号
狭山池調査事務所	狭山池写真集 ふるさとの光景
六甲山麓遺跡調査会	吾妻遺跡
妙見山麓遺跡調査会	兵庫県多可郡加美町遺跡地図(1994年版)、加古川流域の古代史(上・中流篇)、兵庫県生産遺跡調査報告 第4冊 製銅遺跡Ⅰ
尼崎市立文化財収蔵庫	平成3年度 尼崎市埋蔵文化財年報
朝鮮学会	朝鮮学報 第151輯
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ
朝地町公民館	田村遺跡・池在遺跡・古市遺跡・一万田館跡　朝地地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻46号
國立慶州博物館	慶州東方洞瓦窯跡、往時の慶州と博物館
延世大學校博物館	高麗・朝鮮時代の沙器
啓明大學校博物館	開校40周年記念 金陵松竹里遺蹟 特別展圖録
(財)京都市埋蔵文化財研究所	岩倉幡枝2号墳　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第12冊、昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要
(財)向日市埋蔵文化財センター	向日市埋蔵文化財調査報告書 第38集
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成4年度
京都府教育委員会	埋蔵文化財発掘調査概報(1994)
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第32冊
大山崎町教育委員会	長岡京跡右京第402次発掘調査概報 大山崎町埋蔵文化財調査報告書第12集
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第25集(1994)
田辺町教育委員会	飯岡遺跡第4次発掘調査概報(田辺町埋蔵文化財調査報告書第16集)
京北町教育委員会	上中城跡発掘調査概報(京都府京北町埋蔵文化財調査報告書第4集)
福知山市教育委員会	福知山市文化財調査報告書第23集　京都府福知山市遺跡地図、同第24集 カヤガ谷遺跡群、同第25集 下山古墳群Ⅲ、同第26集、同第27集 西中筋東部地区遺跡群発掘調査概報
八木町教育委員会	京都府船井郡八木町文化財調査報告第1集 八木城跡発掘調査概要
宮津市教育委員会	宮津市史 史料編第五巻
丹後町教育委員会	郷土の社寺文化　目で見る丹後町の文化財第2集、丹後町古代の里資料館 常設展示図録
網野町教育委員会	京都府網野町文化財調査報告第9集 十王堂遺跡発掘調査概要
京都国立博物館	平成4年度 京都国立博物館年報
京都府立総合資料館	資料館紀要 第22号
京都府立山城郷土資料館	企画展資料18 長池宿と玉水宿、山城郷土資料館報 第11号(1993)
京都市歴史資料館	京都市歴史資料館紀要第11号、京都市の文化財(第6回)
亀岡市文化資料館	第17回企画展「丹波・亀山藩物語」、私たちの身近にある石造物を訪ねて 愛宕灯籠、亀岡市文化資料館報 第2号

(財)高麗美術館	高麗美術館収蔵品図録1 朝鮮王朝の青花白磁「李朝染付」
同志社埋蔵文化財委員会	京の公家屋敷と武家屋敷 同志社埋蔵文化財委員会調査報告Ⅰ
佛教大学図書館	鷹陵史学 第19号
佛教大学総合研究所	佛教大学総合研究所紀要 創刊号
花園大学考古学研究室	シンポジウム資料 平安京右京の性格
精華町の自然と歴史を学ぶ会	精華町の郷土誌(その1) 波布理曽能 10年の歩み
(財)宇治市文化財愛護協会	文愛 第5号
京都市文化観光局	平安京跡発掘調査概報 平成5年度、鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成5年度、京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度、京都市内遺跡試掘調査概報 平成5年度
(株)岡墨光堂	岡墨光堂創業100周年記念 修復 第1号
福知山市	丹波生活衣コレクション調査報告書
京都考古刊行会	京都考古 第51号～第75号合冊
足利健亮	計画都市の立地決定に至る意志及び経過の歴史地理学的再検討
穴沢咏光	双葉町歴史民俗資料館研究紀要 第2号
椚 國男	多摩考古 第24号
小池 寛	京都学園大学論集第3巻第2号
関口功一	古代史研究 第10～12号
辰巳和弘	引佐町の遺跡Ⅵ
谷本 進	播磨利神城、此隅山城と有子山城(此隅山城を考える第5集)、但馬の城と城下町
坪井清足	縄文晩期前葉－中葉の広域編年
原田三寿	先秦・秦漢史 1987年1期～12期、同1988年1期～12期、魏晋南北朝隋唐史 1987年1期～12期、同1988年1期～12期、中国陶瓷 1988年第1期～6期、同1989年第1期～6期、須代遺跡第1次発掘調査概要(加悦町文化財調査概要7)、平安京跡発掘調査概報、京都市内遺跡試掘立会調査概報、法勝寺跡発掘調査概報、鳥羽離宮跡発掘調査概報、一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報、中久世遺跡発掘調査概報
松井一明	袋井市大畑遺跡 1978年度の発掘調査、土橋遺跡、大門遺跡、昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書、袋井市大畑遺跡、昭和62年度国庫補助事業発掘調査報告書 袋井市長者平遺跡、袋井市春岡遺跡、袋井市長者平遺跡、袋井市考古資料集第1集 袋井の前方後円墳、山田申渡遺跡Ⅰ・Ⅱ、袋井宿Ⅰ－東(田代)本陣－
丸山竜平	古代の製鉄コンビナート 立命館大学びわこ・くさつキャンパス 木瓜原遺跡の発掘
水野正好	まじなひの文化史 水野正好主要著作目録
遊佐和敏	東邦考古 第18号

編集後記

残暑の厳しい日々が続きますが、情報53号が完成しましたので、お届けします。

本号では、当調査研究センターの理事でもある足利健亮先生の講演の記録を掲載することができました。これは、昨年に行われました全国埋蔵文化財法人連絡協議会・研修会の講演で、なにぶん、長大な内容でもありますので、次号とで前・後編とさせていただきました。悪しからずご了承下さい。

また、51号に掲載いたしました職員の論文の続きも本号に収めることができました。よろしく御味読下さい。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第53号

平成6年9月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷　中西印刷株式会社
〒602　京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)